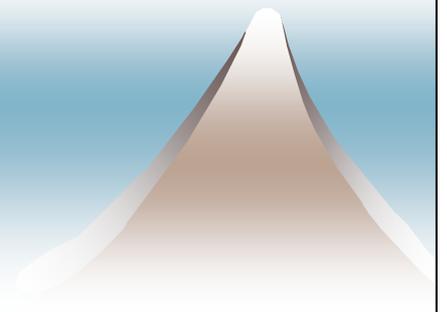
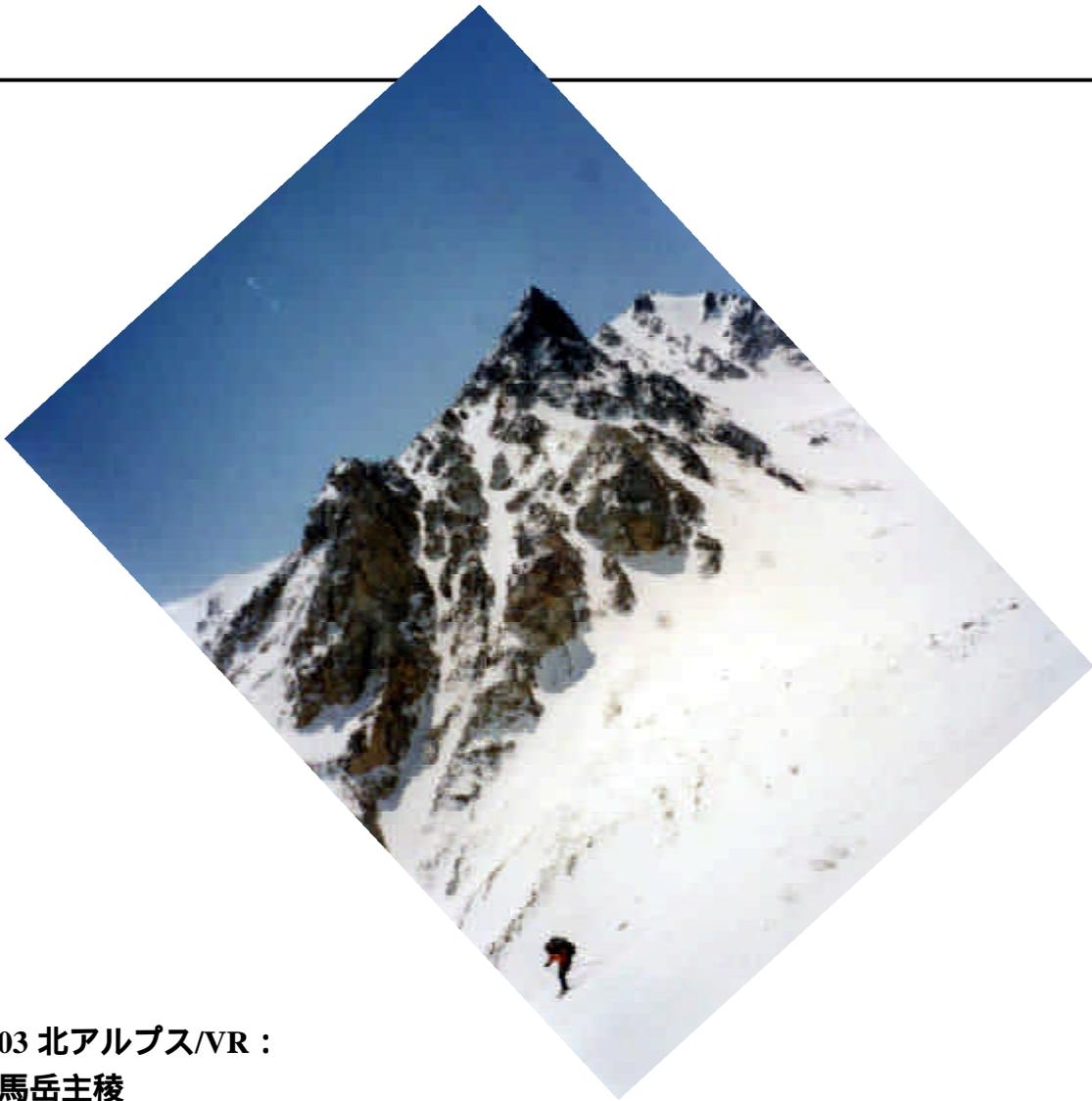


西朋27

西朋登高会

2004年4月





9703 北アルプス/VR :
白馬岳主稜



--- *The Best Photographs* --- 西朋登高会



9708 朝日連峰/WC :
朝日川朝日俣沢岩魚止沢

9903 奥只見/VR : 荒沢岳前峯尾根
5/2 朝, 快晴の前峯頂上で
- バックは荒沢岳 -



--- The Best Photographs --- 西朋登高会



9908 南アルプス南部/WC：兎洞



9917 南アルプス北部/VR：弘法小屋尾根



9917 南アルプス北部/VR : 弘法小屋尾根



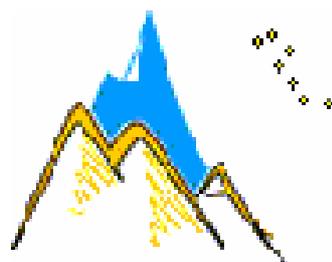
9918 八ヶ岳/VR : 旭岳東稜

西朋 27

西朋登高会

目次

山行総覧	・・・6
山行記録	
1997年度	・・・9
1998年度	・・・35
1999年度	・・・49
西高WV部活動報告	・・・83
西朋登高会会則	・・・85



1997年度(平成9年度)山行総覧

No.	日程	山域/山行形式：山行名	参加者
9710	4/12	信越：湯の丸山	山野，他
9702	4/19-24	北アルプス/VR：鹿島槍東尾根	博多，他3
9703	4/26-27	北アルプス/VR：白馬岳主稜	山田，加藤，上野，清野， 博多，土田，尾崎，灘吉
9704	5/3-5	上越/VR：芝倉沢雪上訓練～谷川岳	山野，加藤，上野，内田， 尾崎，灘吉
9705	5/16-17	北アルプス/VR：穂高コブ尾根，奥穂南稜， ジャンダルム飛騨尾根	博多，他2
9706	6/14	丹沢/WC：箱根屋沢～沖箱根沢下降	上野，内田，清野，土田， 尾崎，灘吉
9707	7/19-20	大菩薩/WC：丹波川小室川谷	加藤，高橋，清野
9708	8/14-18	朝日連峰/WC：朝日川黒俣沢ガンガラ沢	山野，加藤，上野，高橋，
	7/30-31	：朝日川朝日俣沢岩魚止沢	内田，尾崎
	8/12-14	：竜門山～以東岳～泡滝ダム	加藤，上野，高橋，内田，尾崎 尾崎
9709	8/24-31	北アルプス/VR：ハッ峰，チンネ，源次郎尾根 平蔵谷側および本峰南壁の各ルート	博多，他
9710	8/30-31	信越/西朋祭：菅平 目沢山荘	
9711	9/1-6	南アルプス：聖岳～茶臼岳	尾崎，他2
9712	9/9-12	上越/VR：朝日岳～巻機山	尾崎
	9/13	上越/WC：割引沢	高橋，内田，尾崎
	9/14	：米子沢(西高WV付添)	高橋，内田，尾崎
9713	9/27	奥多摩/WC：川苔谷逆川	尾崎，星野，田中(西高生)
9714	10/7-10	南アルプス/RC：北岳バットレス	博多，他1
9715	10/10	上越/WC：魚野川西ゼン	吉田(慎)，山野，上野
9716	10/9-12	南アルプス：黒戸尾根～甲斐駒ヶ岳～早川尾根	尾崎
9717	10/18-19	奥秩父/WC：滝川豆焼沢	高橋，清野，江川，尾崎
9718	11/1-3	南アルプス：白峰南嶺策ヶ岳～転付峠	江川，土田，尾崎，灘吉
9719	11/9	奥武蔵/RCT：日和田山	上野，高橋，内田，江川， 尾崎，灘吉
9720	12/13-14	中央アルプス/VR：スヤマ尾根 冬山偵察	上野，高橋，尾崎
9721	12/26-31	中央アルプス/VR：スヤマ尾根～三ノ沢岳	上野，高橋，尾崎
9722	3/3-5	南八ヶ岳/VR：阿弥陀岳北稜～御小屋尾根	尾崎，西原
9723	3/21	上越/ST：苗場 神楽峰	吉田(慎)，山野，上野，尾崎

1998年度(平成10年度)山行総覧

No.	日程	山域/山行形式：山行名	参加者
9801	4/4-5	上州/ST：武尊山	尾崎，他1
9802	4/19	奥武蔵/RCT：日和田山	高橋，江川，尾崎，星野， 灘吉，清水智
9803	5/2-5	北アルプス/VR：鹿島槍東尾根	山田，加藤，上野，高橋， 清野，尾崎
9804	5/24	奥武蔵/RCT：日和田山	山野，江川，尾崎，栃谷
9805	6/28	奥多摩/WC：日原川 大栗窪	江川，尾崎
9806	7/30-8/1	北アルプス/VR：北穂高岳東稜	尾崎，西原，他1
9807	8/14-16	毛猛連山/WC：只見川大鳥沢滝ノ沢～未丈ヶ岳	山野，上野午，尾崎，上野利
9808	8/22-23	西朋祭：奥多摩氷川キャンプ場	三浦，平野，山野，上野午， 吉田浩，清水直，江川， 清水智，栃谷，天野
9809	9/8-11	北アルプス：七倉岳～針ノ木岳～種池	尾崎
9810	9/24-31	南アルプス：三伏峠～荒川岳～赤石岳	尾崎，他1
9811	10/9-11	足尾山塊/WC：小田倉沢～皇海山	高橋，尾崎，細田，清水智
9812	10/24	八ヶ岳/WC：地獄谷本谷	吉田慎，山野，上野
9813	10/31- 11/1	奥秩父/WC：大洞川市ノ沢～和名倉山	高橋，尾崎
9814	12/11-13	八ヶ岳/VR：阿弥陀南稜～赤岳	高橋，尾崎，細田
9815	12/28- 1/1	南アルプス：池山吊尾根～北岳	山田，加藤，高橋，尾崎
9816	1/17	八ヶ岳/ST：縞が枯山～茶臼山～北横岳	尾崎
9817	3/13	上越/ST：平標山	吉田慎，山田，上野，尾崎
9818	3/27	信越/ST：根子岳	尾崎

山行形式

ST	山スキー
VR	バリエーションルート
WC	沢登り
RC(T)	ロッククライミング(トレーニング)
FC(T)	フリークライミング(トレーニング)
IC	アイスクライミング

1999 年度 (平成 11 年度) 山行総覧

No .	日程	山域/山行形式：山行名	参加者
9901	4/4	東北/ST：安達太良山	尾崎
9902	4/17-18	八ヶ岳/VR：赤岳天狗尾根	内田，尾崎
9903	5/1-3	奥只見/VR【春山合宿】：荒沢岳前嶮尾根～兔岳 ～中ノ岳	加藤，内田，江川，尾崎
9904	5/23	奥武蔵/RCT：日和田山	加藤，内田，江川，尾崎， 清水智
9905	5/30	越後/VR：御前ヶ遊窟	加藤，尾崎，清水智
9906	6/22	奥多摩/WC：日原川長尾谷	尾崎
9907	7/20	奥多摩/WC：日原川巴ノ戸谷	江川，尾崎
9908	8/13-17	南アルプス/WC【夏山合宿】：兔洞～兔岳 ～赤石岳 ～悪沢岳	山野，加藤，上野，高橋，尾崎 加藤，高橋，尾崎 尾崎
9910	8/26-27	北アルプス/VR：明神岳東稜	尾崎，西原，他1
9911	8/28-29	西丹沢/西朋祭：大石キャンプ場	佐藤，黒澤，山野，渡辺，岡田， 加藤，上野，岡崎，奥村
9912	9/5	奥多摩/WC：入川谷布滝谷	岡田，江川，尾崎
9913	9/26	上越/WC：魚野川南カドナミ沢	加藤，星野，尾崎，細田，西 高生：阿部，鈴木，島田，石塚，北爪
9914	10/8-11	南アルプス/VR：鋸岳～甲斐駒ヶ岳	岡田，山田，内田，尾崎
9915	10/31	奥秩父/WC：笛吹川ヌク沢左俣右沢	内田，尾崎
9916	12/4-5	南アルプス/VR：弘法小屋尾根冬山偵察	岡田，尾崎
9917	12/25-30	南アルプス/VR【冬山合宿】：弘法小屋尾根 ～間ノ岳～北岳	加藤，上野，内田，尾崎
9918	2/11-13	八ヶ岳/VR：旭岳東稜～権現岳	岡田，尾崎
9919	3/19-20	頸城/ST：大渚山	岡田，山田，上野，尾崎

1997年度

1997年度役員

会長	山野 裕
チーフリーダー	上野 午良
学生リーダー	博多 誠
会計	山田 裕久
記録・会報	上野 午良
	清野 尚史
	灘吉 聡
装備	灘吉 聡
西高係	土田 精一
	尾崎 宏和
都岳連関係	上野 午良

9703 北アルプス/VR：白馬岳主陵

日程：1997.4.26(前夜発)～27 参加者：山田,加藤,上野(午),清野,博多,土田,尾崎,灘吉

4/26 ゲート 6:50 - 8:06 猿倉 - 13:00 幕営

猿倉で車を下り，林道から白馬尻小屋を目指す。小屋からは大雪渓を左に見ながら，主陵への急登に取り付く。快晴なこともあり，暑いくらいだ。数パーティー入っているのか，トレースも付いている。その急登を登り切れれば，主稜線に出る。ここで一段落し，もう少し登った鞍部にテントを張った。

4/27 発 4:59 - 白馬岳 - 10:04 白馬山荘 - 11:50 白馬尻 12:00

今日も快晴。そのおかげで足取りも軽く，目前にそびえる山頂に向かう。高度感あふれるナイフエッジをつめていくと，目の前に壁が…。これを登るの？，と思うくらいだ。50度位はあろうか，しかも200mくらい続いている。右手のピッケルでバランスを取り，左手でプルージックの結び目を持ちながら，慎重に進む。キックステップというより，ひざで体を支えるような感じである。その壁を見上げると，雪庇が突き出しており，圧迫感を受ける感じがする。

何とか壁を登り切り雪庇を越えようと，今度はものすごい強風。さっきまでは暑いくらいだったのに，尾根に出ると一転。顔が痛い！足早に山頂をあとにし，小屋の影まで下りてくる。

ここまで来れば，あとは下るだけ。スキーの先輩をうらやましく思いながら，大雪渓を駆け下りる。というか，尻セードで滑り降りる。退屈な下りもこれなら楽しい。北アのすごさを感じながらも，白馬岳を登れて大満足の二日間だった。 (灘吉 記)



高みへ！

9704 上越/VR：芝倉沢雪訓

日程：1997.5.3～5.4 参加者：山野・加藤・上野・尾崎・内田・灘吉

前夜に土合駅にて仮眠し、5/3 にゆっくり湯檜曾川に沿って入山。虹芝寮付近の平地にて幕営。少し休んだ後、芝倉沢に入り、右岸の急斜面にて雪訓を実施。ベト雪でウエアーがべちょべちょになってしまう。

翌日5/4 は芝倉沢を詰めて稜線まで行くことにする。内田・尾崎・灘吉の3人は稜線に出てそのまま縦走するので担ぎ上げとなる。加藤先輩は山スキーを持参。沢は締まったスプーンカットの雪面となっており歩きやすい。沢が左に急角度で折れる手前で沢の上部から連続的に落石が発生。人の頭からボーリングの玉くらいの大きさの岩がものすごい勢いで頭上から落ちてくる。暫く、恐怖感でどうしようかと思うが、様子見の後、落石が落ち着いたところで、また登り始める。左への屈曲点より直線状の上部の岩盤より落石してくるようだ。屈曲点をやり過ごし、暫く登った所で安堵の休憩。上部に行くに従いガスがかかってきて視界が殆どなくなってくる。気温がそれほど低くないので、腐れ雪のズボズボ坪足状態で登っていく。まだかまだかと思いながら登っていくと雪の水平線が視界に現れやっと稜線に到着。縦走組の3人と別れて、他の3人はもときた道を下山。下りは速く、落石地点もさくさく下って、幕場に到着。山スキーの加藤氏は下り快適そうであったが、下部は雪面に土と石が混じっているような斜面で、スキー滑走面ともども泣かされていた。

(上野記)

9707 大菩薩/WC: 小室川谷

日程：1997.7.19～7.20 参加者：加藤，高橋，清野

いままで奥秩父の沢ばかり登ってきたので，たまには違う沢へと考え，大菩薩の小室川谷を選定．結局は奥秩父っぽさを堪能でき，楽しい沢登りとなった．

7/19

早朝9：00頃に立川駅に集まり，そのまま奥多摩行き電車に乗り込む．天気も良いので沢山のハイカーが乗っている．奥多摩に着くと早速タクシーに乗り込む．1時間半ほど走り，昼頃三条新橋に着く．

天気も上々，気温も高く，蝉がうるさい．早く水につかりたい気分．車が数台あった．多分釣り人だろう．樹木の茂った泉水谷林道を出合いに向かって歩く．林道の途中途中には停車中の車が目立つ．みんな釣り？

地図で出合いを確認し，下降点と思しきケルンから林道を離れ河床へと降りていく．鬱蒼とした樹林の中をトラバースぎみに降りていくと泉水谷に降り立つ．足周りを沢用にし，早速小室川谷出合いへと向かう．出合いは案外こじんまりした感じだ．周りの樹林が美しいが，沢中は気温が思いのほか低く，早くも水につかる気が失せる．

早速釣り人と御対面．お互い無言ですれ違う．この沢全体で3～4組の釣り人に会った．かなり釣り向きの沢なのだろうか？

沢は水が豊富で，周りの樹林も美しく，想像よりはるかに美しい溪相である．以外と奥秩父っぽい雰囲気があり，とても楽しい．最初の難関S字峡3段8mに着く．とりあえず釜の左側をへつり気味に進んでみる．水量が少ないのか1段目の滝取り付きまでは問題なく近寄れる．1段目5m滝は左側より超える．上から怪しい残置ロープが垂れ下がっていた．2，3段目は容易に通過．

いくつか滝を超すと小室の淵に到着．のぞき込んで見ると暗く先が見えない．そそくさと諦めて巻く．もういい時間なので，幕営することとする．のんびりとした夜がふけていく．

7/20

今日もいい天気．小滝を連続で抜けていくとナメ滝30×50mに着く．圧倒的水量が滑り落ちて来

て、迫力満点。下から見ると3段くらいに感じる。下の1段は容易、2段目から右側による。3段目は傾斜がきつくなる。右のブッシュにホールドを求める。スタンスも何となく滑りそうな不安な感じで、最上部は右のブッシュも少ない。落口あたりから残置シュリングが下がっているが、今一步で届かない。ジリジリと腕を延ばし何とか残置シュリングを掴みごぼうで抜ける。

全般に明るく開けた沢でとても楽しい。登れる小滝が多く、巻きも良く踏まれている。2段 20mを登ると程なく二俣。小滝の続く楽しい登りを続けると、水が細くなり、これぞ奥秩父っていう感じの苔むした針葉樹林帯に入る。

そのまま針葉樹の疎林を緩やかに登っていくと呆気無く登山道に出た。急登もヤブコギも皆無。何て楽な詰めなんだろう。登山道は想像通りハイカーでごった返していた。気を取り直して大菩薩峠へ向かって歩く。天気が良く暑いくらいだ。富士山も綺麗。高山植物はウスユキソウ、シモツケ、ギボウシ等が確認できた。

「ここは高尾山ですか？」的な大菩薩峠の立派な小屋の間をすり抜けて、ピカピカのキーホルダーを横目で見つつ、そそくさと下山。樹林に入ってほっとするもつかの間、又小屋かい。福ちゃん荘を過ぎ、程なく長兵衛山荘。こりゃ、たまげた(死語)。

又登山道に入り、ガンガン下山。千石茶屋から最後のバス停までの引きの長い事。やっとバス停にたどり着き、切符を買って帰路へ着く。この山域は下山がネックと言えよう。ガンがハラスリやま~!

(高橋 記)

9708 夏山合宿 朝日連峰/WC :

朝日川黒俣沢ガンガラ沢～大朝日岳，岩魚止沢

日程：1997.8.14～8.19 参加者：山野，加藤，上野，高橋，内田，尾崎

8/14 朝日鉱泉 8:37-10:40 朝日俣沢出合 11:05-13:25 横吹付沢出合

前夜のうちにそれぞれ左沢まで入り，未明に合流する。

朝日鉱泉から朝日川に沿って歩き始めると，思った以上にアップダウンのある道で，2度ほどの渡り返しをして朝日俣沢とガンガラ沢の出合に着く．そこからは，適度なへつりや滝が多い．ほとんど濡れずに快適に進む．いよいよ川原の兩岸が迫ってくると，正面に横吹付沢出合となる．ここからガンガラ沢本流は右に曲がりゴルジュ地帯となる．

ここからは横吹付沢とを分ける尾根に取りつき長い高巻きとなるようだ．まだ時間的に早いですが，高巻くと時間がかかりそうなので今日はここで泊まりとする．昨年は異常に雪渓が多く残り，この辺りから上流は完全に雪の下だったらしい．でも今年はその雰囲気もない．明日に備えてのんびりする．

8/15 発 6:07-懸垂後の休憩 9:15-15:10 枝沢へ入る-18:40 ごろ幕営

朝一番で高巻きに入る．沢床が見下ろせる所まで来ると，ザイル2本をつないで30mの懸垂下降．下降した所のすぐ下流までゴルジュ帯がせり上がってきており，見下ろせば相当困難そうな様相である．まもなく大滝 20m となる．水流が宙を落下し，それをくぐるように近づいてみると，



ガンガラ沢本流の大スノーブリッジをくぐる

ハング気味のいやらしい感じで、手前左岸まで戻り、ルンゼから巻くがこれまた一筋縄ではいかず、ザイルを出して乗り切った。

しばらく行くといよいよY字雪渓の末端となる。ずたずたに崩壊した雪渓を縫うようにして前進するが、神経を使う。雪渓上に行くようになると傾斜も増してくる。天候もガスが周囲を覆い、見通しがきかなくなりつつある。1箇所残雪が薄く、スノーブリッジをわたるところでザイルを出す。まったく冷や汗ものである。時間的に今日中に稜線に抜けることが厳しくなりつつあり、左岸の枝沢に入って上を目指すはやはり嫌らしく戻ってくる。今日は雪渓脇の小さなスペースに何とかテントを張り、冷気に吹かれながらの一夜となる。

8/16 発6:15-7:51 1600m 地点-8:40 大朝日小屋

天候はすっかり回復した。行く先の雪渓は谷全体を覆い尽くし、傾斜も今以上に急そうである。ハンマーでステップを切りながらの登高を続け、いよいよ雪渓が終了すると、比較的明瞭な窪筋が上がっている。これを詰めると大朝日小屋に出るが、ゴミの散乱が随所に見られ、残念であった。

荷物を起き大朝日岳へ。15分ほどで着く。私にとって初めての東北の沢登りである。頂上に最高の天気で立てたのは何にも代え難い。稜線を北望しても南望しても山また山の遙かなる景色であった。今思えば、最近毎夏通う東北の山の幕明けになったことは言うまでもない。

まだ昼前だが、休養を兼ねて金玉水で泊まる。草原の台地に湧き出る水は寒河江川の源流で、台地を区切る小さな窪は入りソウカ沢の源頭である。そのたもとに広がる幕営地はずばらしく、これまでの山行の中でも最高の場所だった。

8/17 発5:00-平岩山 7:30-朝日俣沢三俣 10:20-14:06 大朝日岳 14:34-14:45 金玉水

予定では15日のうちに稜線に上がり今日は入りトウヌシ沢源頭の回遊だったが、こちらは竜門山まで行かなくてはならないこともあり、昨日に予定していた朝日川岩魚止沢へ向かう。大朝日岳から平岩山まで縦走路を歩き、ここから草原を横切り窪を降りていく。降りていくほどガスが濃くなり暗くなる。それでも10mほど2-3回の懸垂下降をこなし、降り付いたところは三俣の滝場となっている。この辺り、足元はガラガラで少々いやらしく、右俣である岩魚止沢まではショルダーを使ったりして慎重に進む。

岩魚止沢に入るとすぐに50mほどの大滝にぶつかるが左の灌木のふちを巻き気味に登る。その後は落差が身長ほどの適度な滝が連続する。登山体系とおり二条の滝も現れる。再び晴れてきたこともあり、とても楽しく登っていくと小沢となってやがて水もなくなる。少しだけ水を汲んでからヤブを漕ぐと、中ツル尾根の最上部に出て、大朝日岳まではものの数分で着く。頂上で景色を眺め、帰幕する。

8/18 発5:18-6:10 西朝日岳 6:36-竜門小屋 7:32-狐穴小屋 9:26-以東岳 11:54-13:48 大鳥池

今日で先輩達は帰るが、尾崎一人は稜線を北へ進むことにする。不要装備は持って帰ってもらい、

余った食料をもらう。西朝日岳，竜門山と進む。竜門小屋から寒江山辺りではまたガスに覆われた。か細い踏みあととなるが順調に進む。狐穴小屋では再び晴れてきて，目指す以東岳が雄大な姿を見せる。各小屋付近は幕営禁止のようだが，テン場の跡はたくさんある。ホースからは水が豊富に出ており，混雑しなければ小屋泊まりは快適そうだ。

最後のピークとなる以東岳で稜線を南望すると，午後の日には照らされてこれまた印象的であった。下にはタキタロウ伝説で知られる大鳥池が原生林の中にぽっかりと青黒く，何か近づきたい印象を与える。下山はオツボ峰経由とした。最後の稜線は明るく，途中，直下から湧き出る水場で喉を潤す。大鳥池のテン場に着けばもう何も手につかず，残った行動食を食べて早々と寝る。

8/19 発 4:02-6:09 泡滝ダム 6:26-8:38 大鳥

空恐ろしい雰囲気のある漂う湖畔のテン場を，真っ暗な午前4時に出発する。最初の急下降を慎重に降りきる頃に明るくなる。地図では登山道が返り道があつてどうなることかと思つてしたが，ずっと川沿い2時間ちょっとで泡滝ダムに到着する。ここで2時間半ほど待てば夏期運行の登山バスが来るのだが，少々休んだあとに歩き始める。大鳥の集落まで12-3km，アブに追われながら2時間ぶつ通して歩く。バス停前の朝日屋という民宿で風呂に入ろうと思つたが，ちょうど掃除の時間に重なってしまう。近くにあつた，誰もいないオートキャンプ場のコインシャワーで何とかしのぐと，9時15分のバスはもうすぐだ。10時半に鶴岡に着き，帰宅の途に就くこととする。

9711 南アルプス：聖岳・上河内岳

日程：1997.9.1～9.6 参加者：尾崎，他 2(楓，矢ヶ崎)

大学の友達と、山に行こうということになった。それなりの充実感のあるでかいところを、金をかけずに行きたかった。といことで、青春 18 きっぷを使い、小屋が営業期間外でテン場代もいない南アルプス南部ということになった。結局、長野県側から林道をまる一日、易老渡、便ヶ島、西沢渡と歩くコースをとった。

9/1

1 日目は電車で飯田まで行き、バスに乗り換え本谷口バス停で降りて終わり。対岸の暗い林道わきで泊まる。

9/2

発 6:45-8:10 **柿の島** 8:37-9:49 **北又渡** 10:12-11:13 **仏島** 11:54-12:42 **便ヶ島** 13:08-13:51 **西沢渡**

2 日目は林道を 21km。これでも 500m しか登らない。途中の北又ノ渡までは左上に車道があるので、僕らが通った道は荒れ放題で、トンネルなんかもう寿命という感じだ。向こう出口から入る光の形がヘンだと思ったら地面がナナメ 45 度だったり、崩壊地のトラバースがあったり。それでも世間にはモノズキが少なくないようで、落ちていたコンビニおにぎりの包装には 製造日 1997.8.30 とあった。ここから入山した奴がいるようだ(今日は 9/2, だから下山ではないと推理)。けれどゴミは持ち帰るべし。

便ヶ島を過ぎ、道もいよいよ細くなると遠山川の向こうに目指す聖が見上げられる。ついに来た。まるで先人の紀行文 どこかの本に「遠山川を遡る」なんていうのがあったっけ - のような、一種の美学というか感慨がこみ上げてくる (ということにして...20km の林道歩きに意義付けするわけよ...)。西沢渡の川原は、ヒルにやられることもなく快適だった。

9/3 **発** 5:11 - 9:50 **稜線** 10:10 - 11:01 **聖南壁下** - 11:53 **聖岳** 13:08 - 14:45 **聖平**

水深は深くないが、西沢を荷物渡し用のケーブルに助けられて徒渉する。すぐに林業施設の廃墟があり、裏手へ左折する。3 日目にしていよいよの登りだ。地図では長い急な登りも、途中 1 回の休憩で乗り越え、さらに 1.5P で稜線へ。予想外に早く着いたので、今日中に聖往復を決定。前聖からは聖南壁がおおいかがさるように迫っている。南壁直下の水場、といっても水滴程度だったが、よくこんな高い所の、岩の間から出てくるもんだと感心する。ここにはテントも 1 つ張れそう。南壁の急登を終え、頂上に着いた。赤石岳が遠く、はるか谷の向こうだ。大井川の向こうには、笹ヶ岳も見える。頂上は意外と広い。奥聖から聖東尾根をよく見てから帰った。この日の累積標高差

は 2800m にもなった。そのせいか高山病だろうか、頭痛に見舞われた。

9/4 発 5:55 - 8:28 上河内岳 9:50 - 11:42 茶臼岳 - 12:54 茶臼小屋

今日もいい天気。本来は上河内を越え横窪沢までだが、昨日 1 日かせいだし、下るのももったいないので、茶臼小屋止まりとのんびり出発。聖平から主稜線は再び大きく盛り上がり、やがて森林限界を迎える。背後には昨日の聖南面がでかく、威風堂々たる山容である。朝日浴びる縦走路はさわやかそのものだ。やがて左(北)から大きな支尾根を合わせ、上河内手前のピークに到着する。先ほどの顕著な支尾根は、積雪期や視界のない時などの聖平方面への下りにルーファイが要注意箇所となるかもしれない。

上河内岳は南北両面とも二重山稜をもつ面白い地形だ。道はいずれも西側の稜上に行くが頂上はどこちらかといえ東側といった印象を受ける。頂上を巻く道から外れて上河内岳にしっかり登り、しばらく昼寝をする。天然記念物・亀甲状土の横(2万5千匁の御花畑と書いてある所)の北側は、西高春山合宿(96年3月)で来たところだ。大きな二重山稜は、風が遮られて積雪期は良い幕営地になる。夏道は亀甲状土地帯を歩いていくが、積雪期は西斜面の夏道に入らず、進行方向左側(東側)の稜線に行くほうがよいだろう。これを越して、下山路、畑薙大吊橋への分岐点に到着する。

荷物を置いて仁田岳にも足を伸ばす。あとはわずかの下りで茶臼小屋に着く。改築されたばかりの小屋はすでに無人。正面には富士山がでかく、小屋も大きくやけにがらんとし雰囲気だ。ゼリーを作って湧き水で冷やす。ここは水場もあって、夏は快適な幕営地だが、積雪期は雪崩の巣となりそうで、冬は 2555m ピークから尾根をまっすぐ下る。この尾根は細かな枝尾根がたくさんあるからルーファイが難しかった記憶がある。

9/5

発 4:50 - 6:06 仁田岳 6:40 - 8:45 茶臼小屋 9:02 - 10:38 横窪沢小屋 11:31 - 12:31 ウソッコ沢小屋

今日中に畑薙のバスに乗って帰ることは困難なので、てれてれ下ってうそっこ沢止まり。12時には到着し、しばし昼寝をする。ああなんてのんびりしたい山行なんだろう。良く言えば山中での贅沢、悪く言えば暇人。昨日横窪沢まで来ていれば、今日のうちに帰れたのでは。でも、正直、横窪沢は地形的に面白いとはいえ狭っ苦しくてすきでない。

9/6 発 6:37 - 7:20 ヤレヤレ峠 7:54 - 9:06 畑薙第一ダム 9:26 - 10:34 赤石温泉

いよいよ帰宅の日。長くてこわーい畑薙大吊橋を大井川林道へと渡る。いつも何か感慨を感じるところだ。そこから 60 分で第一ダム。もう 1P がんばって静岡市営の赤石温泉へ。無料温泉に入って静岡行きバスを待つ。この季節、バスは畑薙第一ダム発ではない。バスからの景色がなんとも平和で、また乗りたいと思った。

9712 上越/VR & WC : 蓬峠-朝日岳-巻機山, 米子沢遊行

日程 : 1997.9.9 ~ 9.14 参加者 : 尾崎(蓬峠-巻機山), 高橋, 内田, 西高生(米子沢)

9/9 上野 17:27 = 20:56 土樽

6日に南アルプスから帰ったばかり. 18きっぷが余った(使ったが入鉄されなかった.)ので, もったいないから山に行くことにした. 13, 14日に西朋と西高で割引沢と米子沢に行くから, ひとあし早く出かけて, 谷川連峰と巻機山をつなぐことにした. 谷川連峰~巻機山は, 一般コースとして整備はされておらず, やぶこぎとルーファイが必要だ. 水場もない. けれど, ひとつこ一人いないのびやかな山稜, 池塘, 未知の奥利根は魅惑の世界だ. 本当は米子沢がメインなのに, これではどっちがメインなのかわからなくなってきた.

土樽駅に最終で着き, 一緒に降りたおっさんも駅寝だった. 勧められて, しょうがないから超強い寝酒をつきあって, フラフラになった.

9/10 土樽 5:25 - 9:42 蓬峠 10:13 - 12:28 清水峠

歩き始めるとすぐに降ってきた. どしゃ降りになった. 以前, 谷川に来た時も初日は雨だった. 高気圧が来ているので稜線では晴れると信じよう. 今日は行程がとても楽なので, 余裕. セツ小屋山でやっぱり快晴になって, ぬれた服を乾かす. 清水峠では明日行く北の山々を見渡せた. 巻機山は遥か雲の向こうらしい. どんな道が待っているのだろうか. 明日のテン場はどの辺なんだろう. 今日は水場が近くで良かったが, 送電線保守のヘリがうるさい.

9/11 清水峠 5:07 - 6:46 ジャンクションピーク 7:14 - 11:52 檜倉山 12:21 - 15:42 柄沢山北鞍部

巻機山への分岐の道標は立派だったが, そこからびしゃ濡れの笹をかきわけながら進む. 方向確認を怠れない. だが大烏帽子山まではまったく問題無し. 草原に続くか細い一筋が, むしろノスタルジーをかもしだす. ということで気が緩む. しかし, 大烏帽子山からは延々4P ヤブとの戦い. すぐそこまで進むのにも四苦八苦, はたして今自分は正しいルートを行っているのか? まるでラッセルのようだけれど, 雪山よりましか. さすがに冬の上越国境はねー, 高校1, 2年の1月に行った平標を思い出す. とはいえ辛い思い出なんかなんの救いにもなりゃしない. やつとのことで檜倉山に着いた. ああ, もうここでテントを張りたい.

さらに幾度となくやぶを漕ぎ, 急斜面をトラバースして, 檜倉乗越 14:00. あの, 遠く高くに聳える柄沢山のむこうが幕営予定地だ. あまりにも遠い. どこか途中, 張れる所で張ろうか. トラバース, ルーファイ, ルンゼ直登, やぶこぎ... 柄沢山頂上から予定地が見えたときは本当に安心した. あとちょっと, がんばれ. 気象通報にぎりぎり.

誰もいない闇の稜線. ガスが西から東へと流れ, 近くで動物の声や足音が響く. 雨も降り始めた. 明日だけは降らないで下さい. 米子沢で降ってもいいから. でも外に食器を並べてみた. 風で

食器が飛びそうなのですぐやめた。不安な一夜だ。

9/12 柄沢山付近 6:07 - 7:10 米子ノ頭 - 10:53 巻機山 11:31 - 14:38 米子橋

朝が来た。ガスガス。でもこのくらいなら行ける。踏み跡も比較的しっかりしている。天気図からも晴れを期待できる。ササをかき分けつつ進み、米子頭山へ。やがて晴れてきて下の方は雲海になった。ササヤブを泳ぐように進んで、ついに巻機山の草原に出た。ここらへんは登山道の土壌侵食が激しい。

頂上で大休止、もう今日は下るだけだ。澄んだ秋空。雲に浮かぶ牛ヶ岳の姿。そして、越えてきた山々。谷川と巻機をつないだ。

9/13 米子橋 - [割引沢溯行] - 米子橋

前夜のうちに着いていた西朋の先輩方と朝合流する。この日は骨休めということにして、割引沢の途中まで散歩がてらでかけた(高橋 & 尾崎)。内田氏は下流部で釣りの模様。午後、西高生と合流し、ちょっとしたザイルワークの練習をした。明日の米子沢への期待が高まる。

9/14 米子橋 5:00 - [米子沢溯行 8P] - 13:33 巻機山 - (2.5P) - 米子橋

薄明るくなって歩き出す。出だしはうんざりするほどの堰堤群。しばしのゴーロ歩きの後、いよいよ待望のナメや小滝が出てくる。といっても空は厚い曇天で、時おり小雨が降ってくる。右岸の高巻きが終わると、やばそうな滝が現れた。ザイルを装着、トップに登る。さすがに、西高生の前では、緊張のしかたが違う。どんなことがあっても滑落は許されない。登り終えて上で確保していると、皆すいすいと登ってくるように感じた。さあ次はどんな滝が出てくるんだろう。小ゴルジュのへつりが現れた。自分が先頭で、流れに滑り落ちた。そのまま水に腰くらいまで浸かりながら、ヘルメットの脳天を西高生の右手のホールドにする。寒い！上流部の大ナメにさしかかる。晴れていればどんなに気持ちいいことか。頂上まで完全溯行。けれど、湿地を守るには、二俣から左の登山道へ抜けるべきか。(その後、右俣は立ち入り禁止になったらしい。)

下りはどしゃ降りになった。暗いテン場は、豪雨に雷。やっと来たタクシーに西高生が乗り込み、0Bは内田氏の車へ。長かった山行は終わり方も一筋縄ではいかなかった。

9716 南アルプス：甲斐駒ヶ岳黒戸尾根～夜叉神峠

日程：1997.10.9～10.12 参加者：尾崎

10/9 白州 10:41-11:44 駒ヶ岳神社 11:57-14:19 粥餅石水場 14:30-15:43 幕営

今回の山は寝坊から始まった。一人山行の最大のとりえは不意の状況にもめんどろな対処をしなくていいことだ。起きたら 6:00。一瞬、頭の中がごったがえしたが、何とかなることがわかった。気を取りなおして出発し、通勤客にまみれながら立川 6:45 発。

白須駒ヶ岳神社を 12:00 に歩き始めた。笹平では、眺めの良いテン場を見つけたが、本来の予定は五合目までなのでがんばる。1800m 付近（四合目？）にスペースを見つけた。

10/10 発 5:30-7:43 七丈小屋 8:24-10:14 甲斐駒ヶ岳 10:43-15:15 アサヨ峰 15:36-17:14 早川尾根小屋

五合目から七合目の間、そして、八合目から頂上は険しい道だった。でも、さすがに歴史ある登山道だ。ヤミテン跡がたくさんある。遠くには、雪をかぶった北アルプスが見わたせた。頂上では、景色よりも北沢峠から来る人の多さに圧倒された。

時間が早いので、早川尾根小屋まで行くことに決定。駒津峰から休憩なしで栗沢山へ。アサヨ峰の登りはさすがにバテた。西高の春山合宿で思い出のミヨシ手前鞍部を通り、着いたのは 17 時すぎ。夕闇が迫りつつあった。水場は夏と変わらず流れていた。

10/11 発 5:52-8:09 高嶺 8:20-9:04 赤坂沢ノ頭 9:31-10:22 観音岳 10:41-14:25 夜叉神峠

夜が明けても相変わらず風が強い。高嶺の稜線では、冬装が活躍。小雪も舞った。この風の音。春山合宿を思い出す。今日は一日中南側がガスにおおわれていた。鳳凰三山を越え、14:30 頃夜叉神峠着。ちょうどこの辺りの紅葉がきれいだ。

10/12 発 6:03-6:50 夜叉神峠入口 7:06-8:24 村営温泉ロッジ

モルゲンロートの白峰三山もそそくさに、朝一で下りはじめる。夜叉神登山口には、昔トイレだったところに東屋がつくられていた。芦安温泉まで歩いて、朝風呂に入って帰った。家に帰って夕飯を食べていたら、「あずさ」の事故で中央線不通というニュース。トットと帰ってよかった。

9715 上越/WC : 魚野川 西ゼン

日程 : 1997.10.10 参加者 : 吉田慎・山野・上野

前夜に吉田さんの石打の別荘にお世話になり、またいろいろなご馳走を賞味させていただきました。いつもありがとうございます。翌朝早く、毛渡沢の群大ヒュッテまで車で送っていただき、西ゼンに入る。天気も上々、紅葉も映えて水が眩しい。しばらくゴーロ状の沢を行き、第一スラブに到着。幅の広い壮大なスラブであり、その中を水流が細々と流れている。水流のない、乾いた場所を選んで登っていく。ザイルを出して確保して登っていくが、残置ピンがなかなか見当たらず、簡易的な確保となってしまう。斜度はあまり感じず、落ちても腹ばいになって摩擦面を確保すれば止まる程度の斜面である。第一スラブの終了点は2mほどの滝状の斜面である。ほっと一息ついて、すぐに第二スラブが現れる。傾斜は第一スラブよりもあり高度感もあるが、階段状となっており足場が確保されるので、滑落の恐怖感はない。水流の左側をザイルを出して登っていく。第二スラブの終了点も滝状の岩場となっている。核心部を登り終えて、青空のもと3人で感嘆の声を上げる。あとは、細い流れの中を登っていき、熊笹の藪を少し漕いで登山道に出た。(上野記)

9717 奥秩父/WC：荒川水系 滝川豆焼沢

日程：1997.10.18～19 参加者：高橋，清野，江川，尾崎

奥秩父でも名渓と呼ばれる豆焼沢。トンネル開通前に是が非でも遡っておきたかった。その美しさが変わってしまう前に。

工事の始まる数年前に水晶谷は登っていた。最近の工事の影響は、悲しい話で届いていた。豆焼沢は、水晶谷ほど影響を受けていないようだが、ウカウカしてもらえない。開通の直前の秋口、追われるように紅葉の美瀑を訪れた。

10/18 入渓 11:20-12:57 ホチの滝上-15:03 R -15:30 トオの滝上流

透き通るような青空の早朝、秩父鉄道三峰口に降り立ち、タクシーで豆焼橋手前のゲートまで入る。ゲート付近には何やら立派な看板などができていた。トンネルが開通すれば塩山からのアプローチが主流になるのだろうか。

タクシーを降り、アタックを背負ってゲートの先の仕事道へと歩みを進める。ほどなく最初の沢が流入する地点となり、踏み後らしきものを見つける。沢にそった小さな尾根を豆焼橋の根元へ向かって急下降すると、美しい光をたたえた豆焼沢に出会えた。静かな、ゆっくりとした時間が流れていた。秋の空気が柔らかな香りを携えて、優しく頬をなでる。

沢靴に履き替えて早速遡行を開始すると、秋の恵みが美しい色彩で歓迎してくれた。「き」「あか」文字にすると価値がなくなるが、目の前には確かに珠玉の景色が広がっていた。自己ベスト1の和名倉沢に匹敵する甘美な空間である。しばらく美しいナメや小滝を堪能すると、小ゴルジュとなる。流木をわたり、5m滝の左壁をよじ登り、落ち口を左岸にトラバース。

突如垂直の壁に行く手を阻まれた。25m、大迫力のホチの滝だ。そしてその頭上には忌まわしき存在、鋼鉄の塊が我々を見下ろしている。雁坂大橋と呼ばれているらしい。右岸のガレガレの窪からリッジに出るようにホチの滝を巻く。頭上には常に鉄の塊。巻き道には工事関係だろうか、ゴミが散乱している。痛む心を知って欲しい。巻き道上部はもろく崩れ易いので要注意。巻き終えたあたりにトンネルの排水口があり、大量の地下水を吐き出している。見るも無惨な光景で、静かな沢身に怒号の嗚咽が響き渡る。

早く静かな沢に戻りたく、逃げるように歩みを進める。重苦しい気持ちが拭えない。そんな気分のまま、次のゴルジュにさしかかった。意外と水量もあり、腰かムネまで浸かりそうなので左岸を巻く事にした。これに以外と時間がかかる。

それにしても紅葉が綺麗だ。黒光りする岩に張り付いた黄色や赤の葉っぱたちは国宝級の漆器のようで、日本の風土の原点を感じさせる。この美しさは、見たものでないとわかりえない。10回美術館に足を運ぶくらいなら、1回だけ秋の奥秩父の沢に登る事をお勧めする。お金で買えない価値とは、こういう風景であり体験であろう。

それは写真や映像に切り取られた時点で、あるいはこのような文章にされた時点で、その輝きの大半を失う。しかし自身で体験した興奮だけでも、多少なりともお伝えしたい。

しばらくして、美しい釜を携えた二段の滝にたどり着く。名をトオと言う。

下段は右岸から容易。たいして浸からない。上段もそのまま右岸で容易に越えることができる。いつしか鉄の塊も視界から消え、ムネ搔きむしられる嗚咽も聞こえなくなる。トオの滝を越え、幕営する事にした。たき火をしながら、秋の静けさを存分に味わう。1泊ではもったいない沢だ。次に来たら2泊はしたい。

明日の天気も期待できそうだ。秋の夜長は、静かな沢のささやきと共に緩やかに流れていった。

10/19

発 6:09-8:56 50M 大滝上 9:15-10:59 4段 19m 滝上 11:14-13:22 雁坂峠 14:10-16:31 西沢入口

本日も晴天なり。秋の朝は遅い訪れ。ひんやりとした空気とピンと張りつめた水の冷たさが緊張感と呼び覚ます。



50m 大滝を見上げる

早朝の冷たい水を感じながら、いくつかの小滝を越えてゆく。どれも快適に登る事ができ、とても楽しい。

日が沢身に差し込んでくる頃には、50m 大滝にたどり着く。大迫力の美瀑に、しばし呆然。右岸に登山道並みの巻き道がある。岩や木の間を通過する面白いルートだ。大滝上の小滝は手がかりの少ない左岸を越える。

そして4段19mの滝。大滝に登らなかったため、ここは巻かずに登る事にする。下段二段は滑り易いが右岸から容易に越える。3段目は左岸に移動して越えるが、傾斜は緩いがかなり滑り易い。最後の段は再び右岸側を越えるのだが、一步が滑りそうでいやらしいので、尾崎君トップでザイルを出した。右岸にある小尾根に上がり、そこからトラバース気味にザイルを伸ばし、落ち口を左岸へ越える。

ゴー口をすぎると、正面に細い滝がかかり、沢は右手に曲がりながら、60mの美しいスグレ状の美瀑となる。良い表現だと思う。とても美しい。ゆっくりと噛みしめる。過ぎてしまうのがもったいない。自然の造形は偉大だ。

さらに先にも小滝が続く。狭いゴルジュは両壁に手が届く狭さで面白い。やがて水が消えてくる。するとしつこいくらいの赤テープのあらし。いくらなんでも付け過ぎ。この「あか」はいただけません。後はヤブこぎもほとんどなく、登山道にたどり着く。靴を履き替えて、いざ雁坂峠へ！

3回目にして、やっと晴れた雁坂峠。感無量。秋の風が心地よい。峠を抜ける風に草原が優しく揺れる。ただひたすらたおやかな至福の時間を堪能する。

新地平へ向かって下山しようとした時、なぜかMTBと遭遇。ここまで登ってくるとはすごいと思ったら、なんと峠から下ってすぐに林道になってしまった。かつて通った古き良き峠道、新地平からの道は無惨にも消えて無くなっていた。ここに又一つ、失ったものが増えてしまった。壊すのは簡単だが、歴史の積み重ねはもう2度と再現されない。

立派な料金所と舗装道路にたどりつくと、そこは別天地、ようこそ西沢渓谷。燃えるようなオレンジ色に紅葉したトチノキが、道路の傍らにたたずんでいた。その美しさは、物悲しい風景のなかで、ひとときわ悲しく輝いていた。尾崎君は、開通前の記念にループ橋を闊歩していた。将来有望。道の駅がやけに浮いていた。西沢渓谷自体は最奥にあって、あまり昔と変わっていなかった。タクシーを捕まえて、塩山へ向かう。

豆焼沢は良い沢だった。雁坂峠からの峠道は、かつての面影も無い、無惨なものだった。変わるもの、変わらないもの、どちらも望めば、それはエゴなのだろうか？エゴであってもかまわない、変わらないものの価値を大事にしていきたい。

(高橋 記)

9718 南アルプス 白峰南嶺：策ヶ岳

日程：1997.11.1~3 参加者：江川， 土田， 尾崎， 灘吉

11/1 発 5:40-7:09 広河原 -R-R-R- 11:31 檜横手 11:48 -R-R- 14:00 布引山

前夜，下部温泉から老平の登山口までタクシーで入る．明るくなる少し前に出発．危なげな
 栈橋を渡り，少しいくと広川原の渡渉点に着く．いよいよここから急登が始まる．

遠慮のまったくない急登に辟易することとあえず1時間，山ノ神である．溪谷は深くなっ
 たとはいえ見上げる山稜ははるか彼方...今回は，西高の春山合宿候補にと，偵察を兼ねて赤布
 を大量に持参している．赤布をつけながら延々と登り，初めての平地が檜横手となる．ここで
 ようやく半分．

いったん小さく下った鞍部にあるといわれる水場だが，今回は発見できなかった．今宵の布
 引山頂上での幕営だ．この水場が確実ならば，ここで一人4L汲めばよいのだが...

再び登高を開始すると，これまで以上の容赦ない傾斜となる．左からの尾根をあわせ，やせ
 尾根となって，見通しの開けたガレの上に出る．ここも左から小尾根が合流しているので，両
 地点とも下りは注意が必要．稜線がようやく見える．ここから稜線までは約30分で到着し，所
 ノ沢越からの道を合わせると，程なくして布引山の頂上に立つ．

頂上は針葉樹林に覆われているが，西側に踏み跡をたどると赤石，聖の大展望が開ける．登
 りの急傾斜がうそのような広い頂上だ．秋の昼下がりには穏やかに過ぎていった．

11/2 発 5:36 -R- 6:47 策ヶ岳 7:15-8:05 水場へ 8:56 -R-R-R- 13:01 転付峠

2日目，今日はメインである策ヶ岳を越え，ゆっくり転付峠まで．布引山から緩やかに下り，
 再び登りとなると頂上直下で這松を見て，360度展望の開けた策ヶ岳に立つ．東には小策の上
 に冠雪した富士がでかい．西に目を転じれば，冬を目前とした南アの主脈が深い山並みをみせ，
 塩見，仙丈，北岳，甲斐駒まで続く．足元の大井川にはいまだ陽も射さないが，本流の瀬音が
 山ひだに轟いている．

這松尾をピーク往復後，生木割を越え，稜線を歩くのみ．林道跡に合流すると転付峠は近い．
 一段降りた水場脇にて幕営．秋の夜長に話し込んだ．

11/3 発 5:44 -R-R-R- 9:20 新倉バス停

3日目こそ新倉へと下るのみ．内河内沿いの道はよく踏まれ，往年の峠道の風格は充分であ
 った．

結果として，連続各学年1代表の近い世代で楽しい秋山だったと思う．だが，秘峰といわれ
 る策ヶ岳への登頂が，西高の春山合宿に適しているかという点で，山域的に高校生の興味をそ
 そるか，長い急登に耐えられるかなど，少々厳しいかもしれないとの印象を得た．

9720 中央アルプス/VR：スヤマ尾根偵察

日程：1997.12.13～14 参加者：上野・高橋・尾崎

中央本線木曾福島駅に最終で到着の電車に入り、タクシーで上松Aコース登山道入口まで行き、駐車場とおぼしき広場で幕営。

w 翌朝、登山道を暫く行き滑川沿いにスヤマ尾根末端目指して歩いていく。滑川沿いの河原は水流も少なく、渡渉等もなく歩みがはかどる。スヤマ尾根末端まで2ピッチ強だったと思う。末端から尾根筋伝いに登っていく。藪も少なく、尾根筋伝いに歩きやすくなっている。2100m付近で時間切れとなりスペースを見つけて幕営。

14日は12時をタイムリミットとして上部偵察とする。上部に行くに従い歩きにくくなっていく。ハイマツ帯となり雪も少なく極めて歩きにくい。12時前に1本の長く空に向かって伸びている枯れ木の場所を目印として、赤テープを残し引き返す。テントを回収後、正月には雪が積もって歩きやすくなっていることを願いながら下っていく。2週間後にはまたここにきて、ぜひとも三の沢岳までは辿り着くことができるよう祈りながら・・・

(上野記)



宝剣岳への登りから振り返る三ノ沢岳・・・合宿本番で

9721 冬山合宿 中央アルプス/VR :

スヤマ尾根～三ノ沢岳～宝剣岳～木曾駒ヶ岳

日程：1997.12.26～30 参加者：上野，高橋，尾崎

97 年末の冬山合宿は、マイナーで絶対に他のパーティに会わない名山をと探し、中央アルプスの三ノ沢岳に決めた。まずは、12月12-14日に偵察を試み、2580m付近まで登った。そして、檜尾岳へ抜けるルートを予定とし、本番へと突入した。

12/26 雪のち雨

最終電車で木曾福島駅に到着。タクシーで山の湯アルプス山荘(1合目、約1080m)へ。天気は下り坂で、おりからの雪も雨に。偵察時よりも暖かい。びしょびしょの駐車場にテントを張る。

12/27 雨のち晴

5時に一度起きて飯を食うが、雨のため、もう一度寝る。

9時、雨脚が弱まってきたので、出発の準備を始める。どうやら天気予報よりも早く回復しそうだ。アイスクライミングらしい2パーティも出発しようとしている。

10時、雨も一段落し、時おり青空が雲間に見え、陽が射してきた。計画書を登山ポストに押し込み、墓石の横の登山道から歩き出す。敬神の滝小屋(約1180m)までは、雪ではなく、落ち葉が散り敷いた一般の登山道を進む。小屋の前から、滑川沿いに延びる砂防ダム工事用の林道を進む。ほどなく建設中の砂防ダムが現れ、中央部を越える。うっすらと雪が積もった川原歩きとなるが、しばらく右岸を進むと水流に行く手を阻まれる。

11時10分から20分まで、渡渉点にて休憩する。偵察時は苦労して渡渉したが、今は飛び石が置かれている。前方には、遠く宝剣岳をはじめ主稜線が望まれる。天気は回復して青空が高い。川原を進むと、左右の黒茶けた針葉樹の斜面が近づいてきて、川幅が狭くなる。やがて正面に真っ黒な尾根が現れる。

右に三ノ沢を分けて渡渉で左岸に移り、12時30分、スヤマ尾根取り付き点(約1550m)に到着。13時まで休憩する。頭上に三ノ沢岳稜線が望まれる。稜線上の雪は偵察時よりも多そうだが、取付点はむしろ少ないくらいだ。気温は4と暖かい。

ここから樹林の中の急登となる。途中、13時50分から14時5分まで休憩。14時30分、尾根合流点(約1920m)に到着。登高を継続する。大きな露岩が点々とする疎林の平地で幕営によい。ここから若干傾斜が緩む。15時から15時12分まで休憩する。部分的には密ヤブがあるが、原子の雰囲気濃くてよい。

樹林の中の急登を続け、16時5分、幕営予定地(約2150m)に到着。気温は6で、積雪はくるぶし程度だ。



スヤマ尾根上部の雪稜を行く・・・左上が頂上

12/28 晴のちガスときどき晴

4時30分起床. 7時10分出発. 昨日より気温が低く, 天気も上々. 疎林の中を登高開始. 7時36分, 2291m ピークを通過. この先, 少し下降して再び緩く登り返すと緩傾斜の倒木帯になる. 針葉樹の下枝が密で, 尾根幅も広い. やがて倒木帯は傾斜を増して, 後方に開けた疎林の急斜面に変わる. 部分的に大きな露岩があり, 乗っ越しに苦労する. 滑川側がスパッと見え, 高度感がある. 8時40分から8時55分まで休憩.

9時40分, 森林限界到達. ぐるり360°の展望だが, ハイマツのヤブコギが大変だ. 北アはほとんど雲に隠れ, 御嶽にも雲がかかっている. 上空には筋雲があり, ガスに覆われるのは時間の問題かと思われた.

偵察時の引き返し地点(2580m)に, 10時に到着. 10時20分まで休憩. ひきつづき密なヤブコギが続くが, 部分的に露岩が現れ, 左右が切れ落ちてくる. 途中, 三ノ沢側に岩を回りこんで登るところがあったが, 級下くらいの2-3歩なのでザイルは使わなかった. スパッと切れているので, 高

度感がある。前方尾根のはるか先に、2ヶ所ほどのまとまった岩峰が見えた。

11時25分から40分まで休憩。少しハイマツが薄くなってきた。やがて第一岩峰(仮称)に突き当たる。左側よりまわり込みながら登る。級程度の3-4歩であるが、直下の滑川側がバックリ口をあけているので、ビビる。さらにナイフリッジとなる。ハイマツは雪に埋もれて歩きやすくなったが、高度感抜群。終止スネくらいまでのラッセルで、ガスはいつしか主稜線をもおおい隠す。

12時30分から12時40分まで休憩。第二岩峰(仮称)は右からあっさりと巻けた。ほどなく傾斜は緩み、平らな場所に出た。標識はないが、三角点を発見した。

13時、三ノ沢岳に到着して大喜びする。ガスの中、みなバテバテなので早々にテントを張る。風もなく穏やかだ。ときどきガスが切れてきて、景色も望めた。主稜線に向けて、偵察がてらトレースを付けに行く。雪はスネから膝くらいまでのラッセルで予想より多い。やがてガスが切れて主稜線が望まれた。15分ほど進んだところで、双眼鏡で調査開始。北側の谷には、アイスクライミングの2パーティが入っているようだ。そのうち1パーティが、三ノ沢岳先の稜線へ登っている。そこから主稜線までは、トレースが期待できそうだ。

ただ、ガスの間に見え隠れする主稜線は思いのほか遠く、また、檜尾岳はさらに遠く大きくかすんでいた。こちらへは、トレースもないだろう。さらに、メンバーの一人の足の親指が凍傷になったらしい。30日の天候悪化、予想外のラッセル、現時点での幕営場所を考慮に入れ、翌日の行動を再検討することにする。天気図では、日本上空に移動性高気圧がふたつあり、明日の天気は保証されそうだ。明日のうちに安全圏にたどり着こうという結論に達し、檜尾岳方面でなく、宝剣岳を越えて木曾駒～木曾前岳というルートに変更した。

12月29日 晴れ夜半から雪

4時30分、起床。7時20分、出発。360°のド展望。

主稜線に向けてしばらく下ると、昨日のパーティのトレースに合流する。鞍部まで下ってから緩やかに登り返す。ラッセルしたらスネか膝くらいか。8時12分から8時35分まで休憩。その後、尾根は傾斜を増し、主稜線の雄大な懐に吸い込まれていく。

主稜線直下の岩峰を巻いて、関係者の雪原をたどり9時35分、主稜線分岐点に到着する。9時55分まで休憩。やはり檜尾岳方面にトレースはない。前方には大きく宝剣岳が行く手をさえぎる。ここから5ヶ所の鎖場があるらしい。ハーネスをつけ、ザイルを準備して進む。1ヶ所、左右がスパッと切れ落ち、鎖も雪に埋もれていたところはひじょうに怖かったが、ほかはホールドの豊富な岩場で快適に進み、ザイルは使用しなかった。

10時50分、宝剣岳到着。11時まで休憩。早々に下降を開始すると、宝剣山荘方面から1パーティがザイルを使ってゆっくりと登ってきたので、11時30分まで通過を待つ。下降は、トラバースが若干高度感があったが、ホールドも多く、またもザイルは使わなかった。登りのほうが難しくて長かった。11時45分、宝剣山荘を通過して、中岳を越える。

12時15分、駒ヶ岳キャンプ場着、12時45分まで休憩。伊那前岳方面から、2人組みのパーティ

がやってきた。雪の量はくるぶしくらいで、トレースはしっかりついている。

13時5分、木曾駒が岳到着。13時20分まで休憩。昨日よりも天候は安定して、雲ひとつない。本当に明日は崩れるのか。眺めは極上。三ノ沢岳が正面にひときわ目立つ。景色に別れを告げて木曾前岳に向かう。

13時45分、玉ノ窪小屋着。時間的に金懸小屋はむりと思い、早めの幕営。天気も上々なので、明日の崩れはさほどなかろうとの判断をしたのだが、天気図をとると、やはり崩れるようだ。南岸を前線つき低気圧が通過する模様。直撃はないので、そんなに荒れないとはおもうのだが。陽が沈むころには風も強くなり、黒雲がおおいかぶさってきた。仕方なく小屋の陰にテントを移す。小屋にでも逃げ込みたい気分だが、この一帯は冬季開放小屋や避難小屋がない。無理して金懸小屋まで行くべきだったか。

12月30日 雪のち雨

4時30分、起床。風は落ち着いていたが、雪が降っている。明るくなるまで待つ。幸い視界はまずまず。トレースはかき消されていたが、一般登山路のため、ロープや道標もあって問題ない。

8時5分、出発。稜線どおしにルートをとる。木曾前岳の登りはスネから膝くらいまでのラッセルで、ルートはずすと太ももまでもぐる。常に左(滑川)側から雪が吹き付ける。稜線上の風は強い。部分的に見えるロープと地図、コンパスを頼りに、頂上直下のトラバースに入る。ここからはラッセルはなく、コース上のロープも明瞭になって、風以外は問題ない。

8時45分、前岳頂上着。すぐ下降する。心配していた下降点も、杭があってすぐわかった。ルートは時おり尾根をはずれて滑川側に回りこむ。雪が多いと雪崩れそうなので、本来は、尾根上を忠実に行くべきだろう。

9時20分、夏道トラバース分岐点着。9時32分まで休憩。もう風はないが、雪が降り続く。ほどなく八合目遠見場で、森林限界だ。やがて道は針葉樹林の中を下る。10時20分から10時35分まで休憩。天ノ岩戸を過ぎて、11時45分、5合目の金懸小屋に到着する。難と、こやは開いていた。12時5分、さらに下る。四合目付近から天候は雪から雨へ。ずぶぬれになって、緩斜面を下る。13時30分、敬神ノ滝小屋到着。13時45分出発。14時3分には、下山口(二合目)に到着した。

(高橋 記) 【本記録は、山と溪谷 98年5月号に掲載されました。】

9722 南八ヶ岳/VR：阿弥陀岳北稜～御小屋尾根

日程：1998.3.3～3.5 参加者：西原，尾崎

2月下旬に、上野先輩と旭岳東稜に行く予定だった。しかし、直前の雨（現地でも雨で暖かかったそう）で嫌な感じがしたので中止。その代わりに、同期の西原君が京都から帰ってくる機会に、どこか今までよりもステップアップしたところに行こうと、阿弥陀岳の北稜か南稜、または大同心稜を候補に考えた。結局、日程や天候の都合から北稜に決めた。お互い初心者だから、3/1(日)に日和田山で練習してから、と思っていたが、これは雪で中止になってしまった。また、直前に急に体調がおかしくなって、よっぽど山に行くなという事なのかと思ったが、行く。いずれにしろ自分には、旭東稜でなく阿弥陀北稜で相応だったろう。

3/3 茅野 15:35 = 美濃戸口 16:30 - 美濃戸 17:32 - 18:00 ころ 幕営

最終バスに間に合うよう、それぞれ茅野駅に行く。尾崎は所属直後の研究室のゼミを理由をつけて抜け出す。

天気はよいので美濃戸を過ぎても行ける所まで入ることにした。阿弥陀岳はまだ遠く、高い。山頂からの御小屋尾根の下り道を観察しつつ、西高時代の思い出話をしながら、楽に歩を進める。しかし、この天気は明日いっぱいらしい。何としても明日中に危険地帯を通過しなくてはならない。バリエーションに行くんだという緊張が、だんだんと高まる。雪に埋もれた川原の適当なところで幕営する。

3/4 幕営地 6:00 - 8:03 行者小屋 8:29 - 9:16 ジャンクション手前 - 10:28 岩稜帯取付 10:59 - 13:49 阿弥陀岳 14:18 - 14:55 摩利支天 - 16:55 不動清水付近(幕)

予定通り幕営地を後にし、行者までの道を急ぐ。しかし、長い。気持ちがあせっているせいか、やけに長い。すっかり日が高くなった頃行者小屋に到着し、さっそく北稜に向けて進む。ジャンクションピーク手前までの夏道は、どうやら左隣の小尾根上を行っているらしい。我々は右となりの沢筋を少し行き、右側北稜末端の尾根へとラッセルした。ここは初めから小尾根上に行く夏道を取るべきだったか。

ジャンクションピーク付近でガチャ類を装着し、ブッシュまじりの第1岩峰と呼ばれる急斜面を進んでいく。すでに高度感はなかなかのもので、岩稜でなくとも怖い。ここを抜ければいよいよ第2岩峰取付である。岩稜下は小広い緩傾斜地で、誰も居ないし、残りの距離は短いとなるともう終わったような気分で長く休んでしまう。

第2岩峰は最初の数mが核心だ。まだ不慣れなせいか、それを少し苦心して越え、その後も緊張しながら行く。25mほど進んだところのピナクルでピッチを切るが、その上にも良いテラスがあった。さらに岩場を越えるとぱっさりと切れ落ちたナイフリッジが現れ、びびる。なんせ踏み跡は皆

無である。中間を取りたいものの取れずに、ナイフリッジを過ぎた急斜面のハイマツでビレイ。風は冷たく、高度感いっぱいのもと、まだ慣れぬザイル操作は大変だった。そこからは何ともない雪の斜面だが、急でもあるので念のためツルベで頂上まで行く。

下山は御小屋尾根。摩利支天の下りが高度感があり、また少々危険。お助けシュリングで突破する。その後は、美濃戸までの道から見えた西向きの斜面を強風に逆らって下る。不動清水までは所によって雪も深い。順調に下る。

3/5 **幕営地** 8:09 - 11:50 **美濃戸口** 13:10 = **茅野**

天気は下り坂である。出発の時は降っていないものの、下るにつれて本格的な降雪となる。途中、わかりにくいながら分岐を右に取り、美濃戸口の別荘地へ。ここからの道も分かりづらいが、昼にはバス停に着いた。

1998年度

1998年度役員

会長	山野 裕
チーフリーダー	上野 午良
学生リーダー	尾崎 宏和
会計	山田 裕久
記録・会報	高橋 寛和 清野 尚史
装備	灘吉 聡
西高係	土田 精一 尾崎 宏和 細田 学
都岳連関係	上野 午良

9801 上越/ST：武尊牧場スキー場～武尊山

日程：1998.4.4～5 参加者：尾崎，他1(楓)

大学の友人と、春の上州武尊経山スキーに行くことにする。といっても彼はスキーそのものが初めてだ。とはいえ彼は、チャリ部だけあってアウトドア慣れしている。そんなことはあまり気にしないようだ。

4/4 鍛冶屋 9:10 - 10:38 武尊牧場スキー場 11:08 - 15:30 武尊避難小屋

前夜、沼田駅に到着し、駅寝の後朝一のバスに乗る。鍛冶屋バス停からは、2時間ほどの歩きで武尊牧場スキー場に達し、リフトで高度を稼ぐ。緩やかな登りは暑い。三角屋根のちっちゃな小屋は、てっぺんだけが雪の上に出ている。入口まで3-4mほどの穴が掘ってあり、そこから難なく入ることが出来た。

4/5 発 5:51 - 7:21 稜線 7:35 - 8:26 沖武尊 8:57 - 10:35 武尊避難小屋 11:41 - 14:20 武尊牧場スキー場下 = 沼田

緩やかな尾根はなかなか山スキー向きだ。しかし欲張ってはいけませんが、もっと広いほうがいい。傾斜が増し、風も強くなってくると、クラスト気味が多くなりスキーをデポ。やがて正面に現れた雪壁に驚きながらも登り切り、右へ行って稜線に着いたと思った。しかし今度は左から尾根(前武尊方面)を合わせ、今度こそ本当の稜線である。

頂上まで快適な稜線歩きをする。谷川岳が低く見えた(地図からではあたりまえだが)。一の倉沢は黒い。

帰りは往路下山。先ほどの急斜面を注意して下り、あとは快適に麓まで。帰りは地元の民宿のおばちゃんがスキー場から沼田駅まで送ってくれた。すごい。

9803 北アルプス/VR：鹿島槍ヶ岳東尾根

日程：1998.5.2～4 参加者：山田，加藤，上野，高橋，尾崎

5/2 大谷原 7:23 - 7:52 取付点 - 12:20 一の沢の頭

1998年5月2日早朝。ざんざん降りの大雨で、大谷原に集合した西朋メンバーは、早くもやる気が失せかけていた。しばらくトイレで雨宿りする。96年夏、奥只見ダム畔でもこんなことをやってるのがいたねえ！ 他のパーティーも出るに出られずといった状態だ。

雨脚が少し弱まったのを機に、歩き出す。しばらく行って林道右のピンクテープから取り付く。踏み跡は比較的明瞭だったと思う。登れど登れど雪は出てこない。もしかしたら今日のテン場に雪はないとか!? この年は残雪が非常に少なく、いつもなら陽光を浴びつつ雪の上を快適に歩けるはずなのだが、，，，（残雪+好天という、都合よい仮定が2つもある）。

ガイド本（日本のクラシックルート）ではさぞ快適そうな写真が載っているブナ林の中は、いまやどろびしゃの笹トンネルである。それを抜ければアクロバティックなやぶこぎとなる。しかし一の沢の頭には豊富な雪が残っていた。一安心。時間は早いが初日の行動は打ち切りだ。もうやってらんない。これから全てのものを乾かすという、一大作業が始まるのである。幸い雨はやんだが、稜線はまるっきりガスの中。とはいえ、GW初日をパスしたのは正解だった。もし昨日入山していたら、おそらく今日は停滞だっただろう。

5/3 発 4:51 - 8:51 第1岩峰基部(待ち) 9:10 - 11:38 第2岩峰基部(待ち) - 13:30 ごろ第2岩峰上 - 14:15 荒沢の頭 14:34 - 北峰 - 15:58 鹿島槍 16:08 - 17:20 冷池山荘付近

心地よい風とともに、五月晴れの朝がきた。いよいよ今日は鹿島槍東尾根の核心部を登攀する。一の沢の頭を過ぎると、またも雪は消え、泥アイゼンと化す。しかし前方にはダイナミックな景色が明るく輝き、第一岩峰はどこだろうとか、第二岩峰はあれだとか、いろいろ話しながら進む。

急な登りとなり、いよいよ第一岩峰に着く。岩峰というよりもむしろ岩壁である。高橋先輩トップで取り付き、自分はけっこう苦労して越える。第二岩峰はどうなることやら。ハイマツの間を縫うガラガラの急斜面を、ザイルを張りながら登っていく。今年は例年になく寡雪で、このあたりは全く雪がない。以前五龍から縦走したときのことも含め、鹿島槍は印象としてもろい岩でできた山のように思える。

尾根上の小ピークを越えるるとついに第二岩峰である。先行パーティーが行くのをしばらく待つ。1ピッチ目は高橋先輩がリードし、A0ハングの2ピッチ目を自分がリードした。岩の間を左に回

りこむところは高度感がある。しかし核心と思われたハング部分は、左側の岩に小さな段差があり、そこを足場にフリーで登れた。

ここを過ぎれば荒沢の頭は一投足だ。先ほどまでガスっていたのがまたみごとに晴れ渡る。そして鹿島槍北峰に到着。五竜-鹿島槍の稜線は、5月というのを忘れると、雪の多い夏山のような。さて時間はだいぶ遅い。吊尾根の適当なところから雪渓を伝って西俣出合に下ろうかという案も出たが、個人的には疲れていたし、どんな所を下ることになるのか気持ち悪く絶対反対だった。何はともあれ今日中の下山は中止となり、冷池付近で幕営した。春の夕日が剣岳の北方稜線に沈みつつある。雲海に浮かぶシルエットは、本当に日本離れした風景だ。

5/4 発 4:56 - 6:53 西俣出合 7:15 - 8:08 大谷原

赤岩尾根へ入る。まもなくして向かって右側の雪渓に入り、快適に下る。最初は急だったがぼこぼこ足を出すだけで非常に楽だ。西俣出合で冷たい湧き水をたっぷり味わい、頭をぬらしたりしてキンキン状態になる。ここで登山道と合流し、林道になる。みずみずしい新緑と道端に残る雪を愛でながら、そして東尾根を仰ぎながら、大谷原にむけて歩いていく。

9806 北アルプス/VR : 北穂高岳東稜

日程 : 1998.7.31 ~ 8.2 参加者 : 西原 尾崎 他1名

7/31 上高地 6:35 - 9:34 横尾 10:12 - 13:23 涸沢テニ場

大学院入試(直?)前の大学4年生の山行。もう1人は西原の京大の友人。それぞれ京都、東京から出発して朝一の松本駅で落ち合う。初日は雨がちのはっきりしない天気の中、涸沢まで。テント設営後、川崎山岳会のクライマー中村薫さんに案内され、付近でボルダリングにチャレンジする。

8/1 発 4:49 - 6:32 東稜 6:54 - 7:18 ゴジラの背手前 - 9:13 東稜のコル 9:33 - 10:07 北穂高岳
11:50 - 13:59 涸沢 15:45 - 18:48 横尾

2日目、やはり普段の行いが良いのか(違うと思う)、快晴のクライミング日和となる。北穂沢を詰め、道が左へ曲がることから右へ北穂東稜をめざす。北穂沢のガラ場には、昔、ずっと沢沿いだったという登山道のペンキ印が残っていた。東稜に上がれば、向こうに槍の穂先がバリエーションムードをいっそう高め、振り返れば前穂北尾根がダイナミックな光景を展開する。しばらく難なく登り、いよいよゴジラの背という核心部が迫ってくる。しかしここはあえて岩に取り付かないと右からトラバースしてしまうとのことだ。本当に細いナイフリッジにザイルを出して進む。傾斜はとても緩いし、ホールドも豊富なので入門者向けだ。2-3Pほどで小広い台地となり、その先は東稜のコルへ懸垂下降する。あとは北穂頂上へ向けて登りをこなすだけだ。

その日は横尾まで下り、翌日の雨天をかわした。最終日は帰るのみ。

9807 毛猛/WC：只見川大鳥沢滝ノ沢～未丈ヶ岳

日程：1998.8.15～16 参加者：山野，上野(午)，尾崎，上野(利)

8/15

浦佐からシルバーライン。今回は山野さんの同期の岡田さんが車で送ってくれる。

何年前に来て迷った奥只見ダム周辺であるが、今回もまた迷った。炎天下のもと、何とか入り口を見つけ出し、完全舗装道を下流へ歩く。この大鳥林道は、いまでは全面通行禁止となっている。1時間ほどたどると道が右岸に渡るのここから左岸沿いの踏みあとを行く。すぐに不明瞭になって、道は田子倉湖のバックウォーター沿いのじめじめしたいやらしいトラバースが続く。大鳥沢の切れ込みが入ってくると少し明瞭になるが、なぜか上方へ巻き上がっていく。しばらく進んで水深の浅くなった適当なところから流れに下りる。

入渓準備中にアブ大群のおでむかえ。すぐ右に分かれる滝の沢へ逃げるようにして歩き出す。この辺で、ボートで来たらしい釣り師のグループを見かける。釜のある滝は巻くなどして進むといったんガレ状の明るく広いところを過ぎる。すぐにまた沢は急峻になる。左俣に入れば、急で、足場もおぼつかず、それでも下向きの激しい藪こぎとなる巻きがつかった。滝を登ってもそこそこのレベルを求められる。ザイルを出して長い釜状の滝を左からへつり気味に越えたところで、山野さんがめがねを水流に落とす。もちろん回収不能である。

今夜は奥の二俣に小スペースを見つけて幕営する。焚き火は出来なかったが、寒くない安堵した夜だった。

8/16

翌朝一番、本来は左に入る。しかし、4m滝はつるつるの流水溝でもろに水をかぶる。その上には、もっとつるつるでホールドのまったく無い7m滝があるらしい(登山体系)。敬遠して右俣に入る。こちら3-4mほどの滝があり、正面は難しかったが左端のルンゼ状から登り、すぐに中間尾根へ。左俣の滝場が過ぎたところへ25m弱の懸垂で降り立つ。

その後はこれといった滝はなかったように思う。しかし、水がなくなってからが長い。洄れ滝がいくつかあり、やぶを腕力に頼る登りが多い。木々の背丈が低くなっても窪が続く。ようやく出た草原は、それはそれでさわやかなところだった。奥利根からこの付近の山々は、稜線東側に草原が多いように思う。豪雪と季節風のせいかな？

かすかな踏みあとを登ると、右に踏み後が分かれ、これにしたがってやぶを越えると未丈ヶ岳山頂に飛び出す。

大休止しながら今後の行程を検討するが、上海から東シナ海方面には前線を伴った有力な低気圧が進んできており、もとの予定だったセイノ沢下降～大鳥沢は中止する。田子倉湖バックウォーターのいやらしいトラバースをしなくてすんだのも幸いだ。この判断は大正解で、その後の豪

雨が各地の交通網を寸断し、大被害となったのはみな記憶にあるのでは？

登山道を三又口へと下っていくと、岡田さんがわれわれの予定に合わせて登って来た。松ノ木ダワから最後の下りは大汗だった。黒俣沢の渡渉で靴を濡らし、地図以上に長い登り返しでシルバーラインにたどり着く。でも、ダオまでだったらもっと長いんだよなとちょっと自分を戒めた。岡田さんの車で連れて行ってもらった銀山平のホッタテ小屋風呂はなかなかよかった。



25m の懸垂を終えて

9809 北アルプス：七倉岳～蓮華岳～針ノ木岳～種池

日程：1998.9.8～11 参加者：尾崎

大学院入試終了祝いということで、発表前の1週間、ひとり秋の山へ行きたくなる。

9/8 信濃大町 14:30 = 14:46 籠川大橋 - 17:11 七倉

鈍行を乗り継いで、14時ころ信濃大町駅へ着く。扇沢行きのバスに乗るが目的地は七倉なので、大町温泉を過ぎた日向山高原あたり、バス停のないところで降りてもらふ。あとは2時間車道を耐える。トンネルの中は、車の音が響いて無気味と言うか、人間が怖かった。七倉登山口の川原で幕営。

9/9

発 4:17 - 8:30 船窪小屋（水場往復）9:15 - 10:50 北葛岳 - 13:24 蓮華岳 13:52 - 14:34 針ノ木峠

4時前、暗いうちから懐電歩行でがんばる。真っ暗闇の中、落ち葉のかさっという音でもけっこう怖い。しかし、院試が終わった開放感がなんといっても大きい。天気も抜群の秋晴れである。急登も難なくこなしていく。印象として、プナ立て尾根の隣のこの尾根は、一本調子でなく、所々に平坦地があって楽だ。足元には高瀬ダムのロックフィルが見え、その上流には槍ヶ岳が朝日をバックに黒い。初めて西高のOBとしてついて行った時の夏山合宿を思い出す。

「胸突き八丁」といわれる登りもすいすいに行って、森林限界が近い様子だ。さすがにずいぶん登ったなという感じだ。「天狗の庭」とか書かれていたと思うが、そのころから稜線がほとんど同じ高さで迫ってくる。右手には、七倉-北葛のキレットがなんとも気味悪い切れ込みを見せている。船窪小屋に8時半ころ着いてしまった。

思い切って針ノ木まで行くことを決める。旧船窪小屋は船窪岳方面に分かれて急斜面をはしごで下ったところにあっらしい。この場所は、急斜面にぼっかりと空いた小さな平地で、確かに雪崩や落石にやられそうだ（小屋移転の理由）。現在は七倉岳のテン場として使われている。その下にある水場へ行って水を補給するが、その水場は、七倉-船窪-烏帽子の大崩壊地のすぐ上の崩壊斜面から湧いていて、いまにも吸い込まれそうだ。気をつけないと転落しそうだが、小屋の人によれば、秋でも涸れず、動物たちも飲みにやってくる心強い水場とのことだ。

元の、Y字型の分岐点まで戻り、左へ針ノ木方面へと踏み出す。七倉岳の標識を過ぎると、やせた稜線を下降するようになる。危ういはしごでぐと一段下ると、そこは両側がガレたキレットだった。七倉-北葛のキレットである。縦走路は前後ともにザレて不安定で、左右は眺望もきかず（その時ガスっていたのかもしれないが）前後がせまっ苦しく、今となってはなんともいやな印象を思い起こす。

登り返してしばらく行くと北葛岳頂上に達した。先ほどのキレットとうって変わって気持ちの

よいところだ。静かで、北アルプスでもこんな所があるのかという感じだ。薬師、立山、剣の峰々が、鹿島槍などから見慣れたのとは少し違った表情を見せる。そしてその右上方に、すっかり秋の装いの針ノ木岳が。黒装束に身をまとい、その名のごとく鋭い山容が青空に映える。まるで筆でさあっと撫でたかのような、すがすがしい巻雲を背景に、その姿にひとめ惚れした。今でもあの光景は心に焼き付いている。そんなのに限って、写真というものは撮っていないものだ。

さて、主稜線はここから左に曲がって降下する。思ったよりも長い下降の末、蓮華岳とのコルに着く。けっこう広く、幕営跡もある。コルの向こうには、「蓮華の大下り」の大岩壁が迫っている。本日2番目の急登が始まろうとしている。といっても、今日は2日分の行程を稼いでいるのだから、その登りにいよいよ気だるさというか、とにかく疲れを感じ始めた。天気が入ってきたのも、疲労感を助長しているようだ。それでも、コルで休むことなく黙々と登り始める。途中1回休憩したが、順調に高度を稼いだと思う。いつしか、上空は澄んだ青空となり、てっぺんには後立特有の黄色い道標が目立っている。風がとても心地よい。「大下り」は、むしろ、重力加速度にさからって一定速度で下る方が大変なのではないだろうか。

蓮華岳到着。もう安心してよい。がたっと疲れが出て、しばらく居眠りしたような記憶がある。コマクサもすっかり見ることができないが、秋の昼下がりで落ち着いた雰囲気がい。蓮華岳東尾根には見る限りしっかりした踏み跡がついている。

針ノ木峠で、水汲みのため針ノ木雪渓へ下る。帰ってきてからは、テントで何も作る気がせず、行動食食って早々に寝る。

9/10 発4:53 - 5:44 針ノ木岳 5:59 - 6:35 スバリ岳 6:56 - 8:30 赤沢岳 8:54 - 10:00 新越山荘 10:27 - 11:08 岩小屋沢岳 11:27 - 12:35 種池山荘

今日も天気は最高。今日はゆっくり稜線散歩を楽しもう。朝日に照らされながら針ノ木岳へ登っていく。昨日見たかっこいい針ノ木岳に登れるのがうれしい。そういえば、高校1年の初めての夏山合宿で、薬師岳から対岸の針ノ木岳を見たとき。北アルプスの中でも、どちらかといえばマイナーといえるこの山に、なぜか不思議な感覚を覚えたことがあった。そして、その後山スキーで何度も訪れることになるとは。

秋晴れの針ノ木頂上に立つ。黒部の西風が頬にあたり、山の上ではとっくに夏は終わっている。富山平野と日本海も見える。

ここからは北へ向かって下り、やせ岩稜のスバリ岳を越えていく。スバリ岳の下降はルーファイや急斜面に注意。これを過ぎれば穏やかな稜線となる。屏風尾根の突き上げ点は稜線が小さな二重山稜状（というか、真中に窪地がある）で、冬期の踏み跡と思われる分岐があった。稜線伝いに問題なく進むが、途中で、最近ハイマツ帯を強引に切り開いて付け替えたと思われる道が続く、なんとも残念な気がした。

この日は前日の疲れか、スピードも上がらず、まあそれはいいのだが、かったるかった。種池山荘に着いた時刻は、まだ扇沢まで下れたが、テン場でのんびり昼寝して過ごした。

9/11 発 4:53 - 7:24 扇沢バス停 = 信濃大町

朝一で下山する。ここはもう、西高合宿で何度か通って慣れた道だ。針ノ木雪渓が対岸に見える。その上の針ノ木岳があんなに遠い。景色を惜しみながら少しづつ下界が近づく(?)。本当に下界が近づいているのかまったく疑問...、そのまま西高9月山行、東沢の沢登りにハシゴとなるのだ。

9813 奥秩父 市ノ沢～和名倉山

日程：1998.10.31～11.1 参加者：高橋・尾崎

どこか懐かしい空気を感じた。奥秩父の沢に魅せられて、既に何回この地を訪れたであろうか。その奥秩父に有って、知る人ぞ知る不遇の名峰、和名倉山(白石山)。ちょうど8年前の同じ時期、雨の和名倉沢から頂上を目指した。煙る秋雨の冷たさと苔むした2次林、伐採の爪痕、全てが緩やかな時間の中に納まっていた。たどり着いた頂は、凜とした雰囲気醸し出していた。誰もいないその場所は、誰のモノでもなかった。ただ、冷たい雨が降っていた。無音静けさが、モノクロの背景を声高に歌い上げる。それだけだった。それが全てで、それだけで満足できた。

もう一度訪ねてみたい。願い叶い、時愁う。

10/31 秩父湖 10:15-12:15 大洞ダム 12:45-15:36 芝沢出合

この慌ただしい世界の中で、8年間も変わらぬ風景を保てる事は、変わる事以上に難しい事だろう。秋の秩父鉄道三峰口は、数年前と変わらぬ景色で出迎えてくれる。あそこへ登るには登山道からでは風情が無くてよろしくない。路無き路を往くが王道、故に沢より辿るべし。

秩父湖までバスで入り、そこから大洞ダム目指して林道ハイク。1ピッチで和名倉沢の切れ込みを見やり、2ピッチ目にしてダムに着く。看板の所からダムへ踏み跡をたどって降りてゆく。こじんまりとした幽玄な雰囲気の中、無数の蜻蛉に出迎えられる。ダムの堰堤で沢靴に履き替え、そのまま蜻蛉に見送られつつ対岸の作業道を進み、湖の切れたあたりで沢へ入る。和名倉沢と違い容易な溪相で、のんびりと登ってゆく。紅葉は今一つのような。刺すような秋の冷たい水を避けつつ、ナメや小滝を越えてゆく。いつのまにか芝沢まで来ていた。少し早い、右岸の少し高い部分で幕営とした。

11/1 発 6:07-7:01 4m スダレ状滝 上 7:14-8:00 奥の二俣 8:41-10:53 和名倉山-16:24 秩父湖

たいした問題もなく、容易な溪相が続く。途中二俣でルーファイの判断に迷うが、地図をたよりに先へと進む。ほどなく水は少なくなり、やがてアザミ風の草が目立つ草原状の開けた地形となる。上部にダケカンバの疎林が見えるので、そこを目指す。和名倉沢の時は最後の頂上へのルーファイでかなりの時間を要した。今回は迷わないように慎重に足を運んだ。だが地形は明瞭、天気で視界も効き、それほど迷う要素は無かった。ダケカンバ帯を抜け、尾根上に出ると再び針葉樹の密林となるが、赤テープがしっかり付いている。動物のヌタ場を過ぎ、針葉樹をかき分けて行くと、ひょっこり開けた場所に出た。

そこには、かつての神々しい雰囲気が感じられなかった。先客がいたせいもあるが、8年前よりも登山道が整備されているようで、奥秩父主稜線からの往復登山は割と容易のようだ。さらにお客様追加。人知らずのこの頂も、今ではその面影すら感じられない。和名倉山。あたたかな光

の線が、かつての痛々しい記憶をかき消してゆく。これはこれで良いのかもしれない。

下山路は8年前と同じ、秩父湖へ一直線の二瀬尾根を選ぶ。途中までは良く整備されていたが、やはり笹トンネルは健在だった。アンテナ?のある開けた地形を最後に、植林の中へ急降下。最後は吊り橋を渡って秩父湖の林道に降り立つ。後は秩父湖のバス停まで歩くだけだった。

バス停にちょうどやってきたバスに乗り込み、秩父湖を後にする。風はもう冬の訪れを告げていた。次に和名倉山を訪れるのはいつになるだろうか。その時には、どんな表情を見せてくれるのだろう。ふと皇海山の事を思い出す。まだまだ良いのかもしれない、和名倉山。また来よう。

(高橋 記)



秋の沢を溯る

9815 冬山合宿 南アルプス北部/VR：池山吊尾根～北岳

日程：1998.12.28～1999.1.1 参加者：山田，加藤，高橋，尾崎

12/28 - 29

年の暮れせまる東京を山田氏の車で脱出．南アルプスの深い森，夜叉神という響き，なにかそら恐ろしいものを思い起こさせる．2:00 ころ，夜叉神ゲート手前に着く．

発 7:25 - 8:33 **鷲住山下降点** 8:50 - 9:55 **対岸林道** 10:10 - 10:43 **あるき沢橋** 10:58 - 14:28 **池山お池**

自然破壊で悪名高い南アルプススーパー林道を，広河原方面へ約1時間．鷲ノ住山から野呂川までもったいないほど下り，右岸の林道へ．まだ日の当たらない林道は寒々しく荒れている．「あるき沢橋」から登高にかかるが雪は見られず，テン場で水を作れるか不安だ．「雪が少ないから大樺沢から登る」と，スーパー林道を直進したパーティもあったが，雪崩は大丈夫なのだろうか？

一ヶ所，崩壊地上の危うい部分を通る．今でこそ冬のバリエーション的ルートであるが，さすがは北岳への往年のルートだけあって，他の部分はしっかりした踏み跡だ．完全に結氷した池の横で幕営．雪はくるぶし程度だが，水の問題はない．

12/30 **発** 6:10 - 13:06 **トラバース道分岐点** 13:10 - 13:53 **北岳** 13:58 - 15:00 **幕営**

空は雲が多く，上方稜線は乱れ雲がまとわりついている．天候は不安だ．鳳凰三山を右手後ろに見下ろしながらの登高だったのが，いつのまにかガスに包まれている．積雪は徐々に深くなり，トレースは頼りなくなる．途中，北岳を目指すと思われる人々のテントもいくつかある．

樹林を抜け出すと，冬の風が容赦なく強い．前方にポーコン沢の頭が見える．「ポーコン」とは，漢字では「亡魂」と書くらしい．白峰三山縦走予定の高橋，尾崎はフル装備だが，北岳往復だけで帰る予定の山田，加藤両氏は，途中，テントなどをデポする．

八本歯の稜線を過ぎると本格的な降雪となる．岩稜を八本歯のコルへ下降するところは，残置支点を利用して，吹雪の虚空へと懸垂する．右は雪崩の巣と化した大樺沢だ．

北岳東斜面の登高にかかる．西風が遮られるためか，雪の量は増し，膝程度のラッセルとなる．体力的，精神的にもかなりきつい急斜面である．真夏の最盛期，八本歯の頭から北岳を望む，あの明るい写真をご覧になったことはあるだろうか？大樺沢から登り，最後の登りに挑むあの軽快な登山者の姿を．それが今では，ルートはすっかり雪で埋まり，危険箇所のはしごにはいやらしい湿雪がくっついている．

距離にしたらいくらでもないはずだが，やっとのことで分岐点に着いた．やった，稜線だ．-----本当に思いこみ，信じていた．

さああと一頑張り，空身で頂上を往復することに．今となってはよくもあの状態で空身なん

かやったと、反省。風で雪は吹き飛ばされ、氷結した岩礫剥き出しの斜面となる。強風のせい、急登のせい、この一步の辛さはラッセルの時と変わらない。それにしても、斜面を右上に見ながらのルートはおかしい気がする。あの分岐から頂上の西斜面に出たのか...？

あっ！左、間ノ岳、右、北岳山頂を示す道標、その向こうは大ガス状態。ここが稜線の分岐で、あれはトラバースの分岐だったのだ。地図で確認もせず、事前のルート調査も漠然として、基本を怠っていた。けれど、冬のこの状況では、普段当たり前のことができない、自然の猛威の前では人間なんてこんなものだと思感した。

今度こそ稜線をたどる。下るときに西側への小尾根に迷い込まないように周囲をよく確認しながら登る。左右ともに切れ落ちてきて、稜線そのものも傾斜がなくなると頂上に着く。

トラバース道の分岐に戻る。山田、加藤両氏はすぐに下山にかかるが、縦走予定の高橋、尾崎は残留する。時刻は午後2時。

(以下高橋、尾崎)

もう時間は遅い。おそらく、トラバース道も可能とみた。この状況で、ザックを背負ってあそこまで登りかえすの気力は...。トラバース道が我らを誘惑する。我々ふくめ何パーティかがトラバースに入った。ガスに包まれ、視界は悪い。丸太でできた栈橋を過ぎると、雪崩れそうなルンゼの後、ルートは完全に雪に埋もれ、先行した一人が戻ってくる。主体的判断でないのも反省だが、とにかくいやな感じを受け、急いで引き返す。が、このときも何か背中を引かれるような、頭は分かっているも体が応じないような、理性の面でも感性の面でもいやーな、それこそ遭難と遭難者の霊、みたいなとても怖い気持ちで、足を出してももがくだけの様な思いで引き返す。戻って3時。天候は相変わらずである。北岳山荘へ行っても、天候と疲労状態から5時近くなり、混雑も必至と見て、その場で良い場所を見つけ幕営する。幕営場所は安全だったが、夜は非常に寒く、シュラフを締め切って寝たら中で酸欠となる。おそらく-20は切ったのではないかな。

12/31 発 8:20 - 12:15 池山御池

農鳥から大門沢の下降も雪崩れるのではと、昨日の雰囲気からビビってしまう。間ノ岳までの往復も考えるが、いまだ降雪激しいので往路下降を開始する。難無く進むが今日中の帰宅は難しいので池山お池でまた泊まる。ビーコンの練習をやってみた。紅白を聞いて1998年が暮れる。

1/1 発 7:00 - 8:50 林道 - 12:30 奈良田

1999年は快晴の朝であった。しかし気持ちは浮かなかった。途中で会った人から、97年末ちょうど約1年前に、あのトラバース道で雪崩死亡事故が起きたことを耳にした...! 鷲ノ巣山の登り返しがだるいので、林道を歩いて奈良田へ。これでゴールだけは予定通りになったわけだが...

反省ばかりだったが、神妙だが貴重な体験のできた山行だったかもしれない。(2003.9.6筆)

1999 年度

1999 年度役員

会長	山野 裕
チーフリーダー	上野 午良
学生リーダー	尾崎 宏和
会計	山田 裕久
記録・会報	高橋 寛和
	清野 尚史
装備	尾崎 宏和
	細田 学
西高係	尾崎 宏和
	細田 学
	清水 智子
都岳連関係	上野 午良

9901 南東北/ST：安達太良山

日程：1999.4.4 参加者：尾崎

4/4 黒磯 5:46 = 7:20 二本松 7:48 = 8:30 塩沢温泉 8:53 - 10:36 勢至平 10:41 - 12:37 安達太良山
- 13:50 くろがね小屋 - 15:26 塩沢温泉

前夜最終の黒磯行きに乗り，新幹線高架下で寝る．翌朝の一番列車に乗って二本松で降り，塩沢温泉行きのバスに乗る．バス停は駅前から少々離れているのと，この時期は奥岳温泉行きのバスはもう終了しているのが，本コースはメジャー本流でない感を強くする．

二本松スキー場ももう終わっている．ゲレンデわきを登り，尾根沿いに旧林道跡を登って行くやがて広々とした雪原に出て，山スキーにはもってこいだ．天気も快晴だ．左から奥岳温泉方面からの道を合わせ，やがて右にくろがね小屋への道を分ける．その後地面が出ている登りではスキーをはずし，籠山を越えれば安達太良山本峰と矢筈森の間に広がる緩やかな斜面を正面に見る．いったんそこに滑り込み，安達太良本峰に登り返せば，頂上直下で安達太良高原スキー場方面の道と合流する．ここで板をはずせば，岩の突起状の形をした頂上には数分だ．

さていよいよハイライトの下りだがせっかくなので矢筈森付近まで稜線を縦走っぽく歩く．左下は噴気口があり，以前確かここで事故があったような．あとはとても快適な緩斜面を時おり転びながらも，スピードもそこそこ出して，山スキーの楽しさを味わうには絶好のコンディション．温泉付き山小屋と有名なくろがね小屋を試みようとして，小屋に続く小谷を無理なくターンしながら滑り込む．確かに温泉が沸いており，手を温めてから元の尾根へとトラバースする．このあたりは雪はない．もと来た道に合流し，行ける所まではスキーですべり，二本松スキー場の残雪を再び滑ればちょうど15時半のバスに間に合った．

9902 南八ヶ岳/VR：赤岳天狗尾根

日程 1999.4.16～18 参加者：内田，尾崎

4/16

高尾 22:25 発最終で出発，小淵沢で駅寝．ホームのログハウス風待ち合い室に入り，勝手に電球を外しておやすみなさい．僕らが高校生の頃までは，「ゼロゼロツアー」という新宿 0:02 発の松本行普通列車があった．延びるのは新幹線と高速道路ばかり．社会全体が，金のある者のみに有利な構造になっていく，その断片を垣間見るような気になった．

4/17 小淵沢＝清里 6:55＝7:05 登山口 7:16 - 9:32 出合小屋 9:51 - 13:22 森林限界手前 13:35 - 15:30 ごろ幕営

快晴．目覚めると，銀屏風のような甲斐駒 北岳 鳳凰三山．振り返れば権現岳が渋い．山々がモルゲンロートに染まり，荘厳さに圧倒される．清里まで来ると，氷の世界はますます迫り，目指す天狗尾根が鋭いスカイラインを落とす．気合入りまくり!!

美し森手前の登山口から 1P 強，地獄谷の川原を出合小屋めざす．小屋付近で約 10cm の積雪をみる．右手上方には大天狗の岩峰が立ちはだかり，その高さや堂々たる容姿におもわず惚れ込む．さあ本格的な登りにかかるぞ．

赤岳沢に入り，5 分くらいのところで，右岸からのルンゼの赤布にしたがって天狗尾根に取りつく．部分的にやぶラッセルの洗礼を受けるが，大天狗はさらに大きくかぶさってくる．下部樹林帯は平坦なところも多い．所々に岩が出てきて，「カニのハサミ」かと思わせるが，みんなダメだった．思った以上に距離があり，ルート図にだまされたことに気付く（ルート図は核心部を強調して，実際の距離を反映しないから...^;）．やがて権現岳と標高を競うようになり，急な林の中のラッセル登高になる．もうすぐで樹林を抜けるはずだ．

急に明るく開け，ついに森林限界だ．ここにはテントを張れそうなスペースがあり，快適な一夜を約束してくれそうだ．すぐ上には内側に向き合った怪奇な岩塔が 2 本，「カニのハサミ」である．いよいよここからは岩と雪の世界だ．カニのハサミは左から巻く．真っ青な空へ向けて一直線，雪稜を心地よい緊張感とともに前進する．

ついに岩壁の基部に立つ．これは右からまくこともできるらしいが，見た感じではかえって悪そうだ．巻き道がどうであれ，ここは真っ正面からガッツリ行こう．ザックに毛手袋をつけてのザイル登攀実践は，けっこう緊張．日和田のトレーニングとはやはり違う．これでアイゼンも必要だったらかなり大変そうだ．登りきると，そこにはダケカンバの太い幹が心強い．これにシュリングをタイオフし，「ビレイ解除!!」．斜光の山々にこだまして，快!!! 雪稜が続き，登攀ムードは最高潮だ．

けれどそろそろ時間が気になる．15:00 をまわり，これ以上進むと幕営できるのはキレットま

でないだろう。日没に間に合わない可能性が高い。ザックをおいて大天狗の岩峰の偵察を試みる。そのスケールの巨大さ、岩の質感は、今までの印象をはるかに上回っている。これをザイルを出して登っている時間的余裕はない。ザックのところに戻り、カンバやツガ疎林の生えた雪の斜面で幕営を決定。

さっそく整地に取りかかる。雪面を切り崩し、素晴らしいテラスができあがった。北には赤岳、南には権現岳を望みながら、気象通報を聞く。春の夕暮れ時、本当に雪の山にいるんだなあと、ラジオの響きが満ち足りた気分にしてくれる。

雪のテラスで食べた、しょうが、にんにく、ピーマン、サラミソーセージ入りのペミカンカレーは絶品だった。

4/18 幕営地 4:56 - 5:30 ごろ大天狗手前 - 8:18 主稜線 8:33 - 9:41 ツルネ 9:54 - 12:03 出合小屋
12:20 - 14:46 清里

ほのかに明るくなるころ、最高のテン場をあとにする。登攀具を身につけ、クラストした雪稜にアイゼンをきしませる。アイゼンのキーンという音に風の声が重なり、雪山の緊張を高める。やがて岩と雪のミックステとなり、左右も切れ落ちてくる。

岩をまわり込み、ついに大天狗の真下に達する。左、地獄谷を直下にして、強風を浴びながら直登に挑む。ところが、ホールド、スタンスともに遠く、オーバーハングした壁に泣く。ルート図の解説以上に難しいのではないか。この高度感、吹き付ける寒風。どうしても1歩が出ない。手袋をはずして再挑戦するが、冷たさに負ける。ピッケルを落とし、あわや失うかもというハブニングもあり、直登は断念する。ひょっとしたら別の部分から登れるのだろうが、観察してもわからない。幸い、大天狗は右から巻くルートがあり、そこに行く。悔しいので、簡単な岩のトラバースでも、あえてザイルを使用する。

結局、大天狗はいともあっけなく巻き、主稜線も間近。きっとこんなところで油断して足を引っかけたり、滑落したりするのだろう。慎重にリッジをたどり、小天狗を左から巻いて縦走路に飛び出す。向こうの尾根に氷がいた。四つ足動物は、アイゼンなしでも平然と急雪面を飛び跳ねていく。

縦走路合流点で大休止する。一般路はここから右へ下っている。大学一年の夏、初めて南八ツ縦走をしたとき、正面に大天狗が見えて、道はどこに続いているのか、あんな所絶対に行けっこないぞと不安だったのが懐かしい。ところで、天気の方はそろそろリミットが近そうだ。さっきまで見渡せた南アルプスはあやしげにたなびくヴェールをまとう。八ヶ岳の標高からして、あと1時間くらいで雲に包まれるだろう。

赤岳登頂は中止して、キレットへ下降する。夏はガラガラのガリーも、雪がつけば楽に下れる。予想通り、キレットまで下ると赤岳や大天狗はガスがかかり、天狗尾根の眺めがなくなったのは残念。ツルネまで登り返すと、いよいよ風雪となる。

ツルネ東稜を出合小屋へ。途中2、3ヶ所右の枝尾根に迷い込みそうなどころがあるが、とに

かく忠実に真東へ下る。こんな時、地形図の磁北線は欠かせまい。積雪期のツルネ東稜はルーフ
アイが必要だ。いつしか雪はミゾレになり、雨になった。出合小屋に着く頃には、雨あしはいよ
いよ本格的になった。「やっぱ雨にはカサだよな！」雪山バリエーションをやった充足感と余韻
に浸りながら、春雨に打たれながら歩いてゆく。スマートな山行だった。

9903 春山合宿 越後・奥只見/VR：荒沢岳～中ノ岳

日程：1999.5.1～3 参加者：加藤，内田，江川，尾崎

ついに念願の山に行くことになった。上信会越国境山群は、いまだ自分たちにとって未知の領域であり、未開の雰囲気と奥深さ、北アや南アとは異なる神秘のようなものを感じる。

荒沢岳。この山は、越後駒～大水上山の主稜線から派生する、ゆるやかで長大な山稜が最後に銀山湖へとすいこまれる突端に屹立する。その雄姿はまさに奥只見の秘峰といわれている。

というわけで、またもマイナーな山になってしまったようだ。ベースキャンプ式で、ちょっとばかりメジャーな山なら、合宿にたくさんの方が来れる、とか言っていたはずなのに。

5/1 浦佐 8:50 = 10:15 銀山平 10:38 - 12:49 前嵯手前 - 17:30 ころ第3 ピナクル頂上 17:43 - 18:16 前嵯

4/29 は休養日のつもりだったが、ふとした失言!?から、西高の新歓に行くことになる。5/1 当日は、朝の新幹線代がもったいないので、埼京線で大宮までかせぐ。GW 初日とあって、早朝でも自由席は満員、デッキでザックに座りこむ。新幹線は速く、ここが本当に浦佐なのか、不思議な感じだ。バスにのって、登山口には10時過ぎに着いた。積雪は1m以上、そこはまさしく銀山平である。

最初は急登で、高度を稼ぐ。前嵯尾根に1Pで登りつくと、前方には荒沢岳の全容が見渡せた。そしてその下には、問題の前嵯が、黒々と不敵の笑みをうかべていた。

2P目は、所々に登りがあるが、夏道が出ていて楽に進む。むしろ左側は雪庇となっていて危なっかしい。尾根はいたる所で広々としており、山スキーだの、スノーキャンプだの、果ては昼寝だの、余計なことを考えてしまう。やばそうな前嵯より、その方がよっぽど魅力に感じた。

そんなことを思いながらいくと、単独の若者が「自分にはどうも登れない。」と下っていくのに出合った。

ついに前嵯手前まで来た。休憩しながらルートを観察するが、まだ少し離れているためよく分からない。いよいよ鎖が出てくるところで、中高年グループが降りてきた。「いやあ、すごい道で、岩なんかすとーんと絶壁になってる。あきらめる。」これを聞いてかなりの精神的ダメージを受けた。前嵯には夏道がついてるんだろ、難路っていったって、必要におおじてザイル出せばそう難しくないだろ。計画段階からそう考えていた。だが、それは決定的間違いで、山をなめきっていたということが、まもなく明らかとなるのであった。

ハーネス、ザイルを準備して進む。確かに一般道としては、厳しく急なはしごや不安定な道だ。左が切れ落ちた雪渓の上を、右手の岩壁に沿ってトラバース気味に登る。すると3～4mほどの足場のまったく無い、のっぺりした岩にぶち当たった。左側から巻くのは、雪があまりに不安定と見える。下手したら谷ゾコへ直行だろう。その岩と岩壁の間の、ハング気味の雪壁を越えるこ



前嵐手前の岩壁下・・・ほんのコテ調べ
やがてのっぺりした岩が現れる

とにする。アイゼンを装着し、ピッケルでルートを工作。たいした困難もなく登ることができたが、ここより上には踏み跡はなく、皆ここで引き返したようだ。

さて、こんなもんかと気を取り直して進む。視界が開けると、そこには、甘いんだよ、と言わんばかり、ピナクルが3つ立ちはだかっていた。

第一ピナクルは残置ロープが垂れ下がっていて、その下部には黄色ペンキで×印と左向きの矢印があった。おそらくトラバースの夏道を指しているのだ。左は不安定な雪渓で、夏道がどこに続いているか、見当もつかない。雪渓は今にも崩れそうで、どこでブロック雪崩が起きてもおかしくない。夏と冬ではルートがまったく違ったのだ！甘かった！！右下蛇子沢側は断崖絶壁で、左側は、一見すると外傾した階段状の岩だった。正面突破を図ろうとするが、近づいてみると、足場が細かく、少々ハンゲっぽくも感じ、左側から巻き気味に行く。外傾バンド上の木の根を越すのに冷や汗をかきながらも、それを越せば容易だった。尾根上に数mやぶを漕ぐ。

続く第二ピナクル。道のわきに突っ立っている、つい見上げてしまう岩といった感じで、これを登るという発想は、普通だったらまず浮かばないだろう。よく観察すると、残置ハーケンが3つ。右下へ踏み跡らしきものがあったが、これをたどったところで巻けそうにない。ルートはここしかないようだ。

気合いを入れて挑む。1つ目のハーケンにヌンチャクを掛けるところまで登るのもてこずった。浮き石があったり小さな足場に全体重を預けたり、肝を冷やす。ホールド、スタンスが非常に細かく、厳しい。左、中荒沢側にあるものといえば空気だけ。さすがに登れないかも、だめか



第2 ピナクルの直登 +

も、という甘えが脳裏をかすめる一方で、甘えてられる状況かよ、というもう一人の自分がいた。何しろ、すぐそこにあるものといえば岩と空気だけなのだ。ずり上がって2つ目のハーケンに中間。人間、必要に迫られれば何とかやるもので、2つ目のヌンチャクをつかみ、3つ目のハーケンには足を掛け(反則!?)上部凹角にたどりつく。ほんと、寿命縮んだ。ここからも灌木に慎重にビレイをとり、第二ピナクル頂上のハイマツ帯に到達した。セカンド以降も苦労しているようで、引っ張り上げがこれまた大変だった。

ほっとしたのもつかの間、第3ピナクルが待っている。もう勘弁。祈った。急斜面のやぶを進むことができた。いままで、やぶの存在を、これほどまでにありがたく感じたことはあっただろうか。落ちる心配がない。このときほど、やぶに感謝したことはなかった。この枝が抜けたらおしまいだな、というところが一ヶ所あったが、さほどの苦労なく第3ピナクルに達した。セカンド以降は上からザイルを垂らし、確保した。

すでに陽は西へ傾いていたが、一本入れてから、もう少しがんばることにする。気が付くと、トラバースの夏道が左下から合流しており、前峯頂上は近いようだ。が、ここから40mくらい、積木状のナイフリッジの上に行くことになる。三ノ沢岳合宿の、宝剣岳手前ナイフリッジよりは広めだが。これを慎重に越え、ありがたくやぶを漕ぎ、前峯頂上の残雪上で幕営、18:16。

荒沢岳はまだ遠く、高い。もうあんな岩はないんだ、とりあえずの難場は切り抜けたんだ、し

かし、明日の長い縦走にも、天候やルーファイ、ひよっとしたらラッセルといった不安要素は多い。快晴の春の夕暮れ、安心感や開放感よりも、むしろ希薄な緊張ムード漂う幕営だった。

夜になって雲が広がる。天気は3日まではもつ、という予報だったが、山は早くも下り坂なのかもしれない。

5/2 前嵯 6:00 - 7:44 荒沢岳 - 10:20 灰ノ又山 10:47 - 11:41 巻倉山 12:05 - 14:11 兎岳

朝が来た。天気はよい。6:00に出発する。

登るにつれ、ますます展望は開ける。まず北に毛猛山塊の未丈ヶ岳、左へ守門、浅草方面、そして越後の盟主、駒ヶ岳、そしてめざすべき中ノ岳が視界に飛び込んでくる。だが、北方の山々は、刻々と雲に覆われ始め、天気が心配だ。

いよいよ荒沢岳の頂稜へさしかかる。今度は南側の展望も開け、燧ヶ岳、平ヶ岳、利根川源流の山々、巻機山。白銀の山々が横たわり、波うち、長久の世界をつくっている。まったく存在価値のない鎖場を越えて、7:44、荒沢岳の頂上に立った。快晴、行く手の稜線は完全に見通すことができる。安心してはいられない、これから始まるのだ。遠く果てには主稜線と合流する兎岳が見える。越後駒や中ノ岳と比べると、かわいらしい山容だ。「越後三山」は、単に3つの山からできているのではなく、連なる山並みは、白峰三山に勝るとも劣らない。

所々にやぶが出ているものの、残雪上を快適に進む。最初の小ピークで左へとルートをとる。始終、越後駒、中ノ岳、兎岳を眺めながらの縦走で、奥只見、奥利根の山の奥深さを感じる。ラッセルの心配はなく、下りなどではアイゼンが欲しい。やがて稜線は緩やかに右へカーブし、灰ノ又山へ達する。このころには雪も柔らかくなり、アイゼンだんごがわずらわしい。山スキーには絶好の斜面で残念。でも荒沢岳の岩をスキーを背負って登れたかって。ぜったい無理。

我々が今、鋭意前進を遂げているこの尾根は、銀山湖へ注ぐ北ノ又川、中ノ又川を分けている。灰ノ又山では、北西方向からの尾根に踏み跡が続いており、残雪を利用して北ノ又川から登ってきた人がいたのかもしれない。ここから、兎岳までの稜線が一直線にピークを起こしている。振り返れば荒沢岳は高く、残雪とハイマツのコントラストがピラミダルな山容をよりいっそう引き締めている。順調な縦走で安心し、30分の大休止とする。地図を見れば、距離もアップダウンもこれからで、ばかにはできない。

次のピークの源蔵山からは、顕著な尾根は西北西へ続いている。ここからは、左のただっ広い疎林の中を下る。本当に広く、ガスっているとルーファイに難儀しそうだ。

灰ノ又山を過ぎたところから、体調がおかしい。サングラスをしていても、日差しを強く感じた。登り返した巻倉山では、深呼吸すると胸が痛んだ。ここから一度下っていよいよ兎岳への最後の登りのかかる。高低差はおよそ290m。記録を書いている今でこそたかが290m、夏ならルンルン1Pのところ。しかし雪山では、確実なキックステップ登高と雪崩回避のルーファイ技術が要求される。おまけにやぶこぎ、体調不良ときて、きつい。耐えかねて、1780m小ピーク手前で休憩(12:49-13:15)。出発するのが非常に辛く、ずるずると25分経過してしまう。行くしかない

と心して、もう1P、やっとのことで兎岳に到着する。(14:11)

安心したのか、どっと疲労があふれてくる。みんなザックを投げ出し、ぼうっと放心状態(?)。軽く息を吸うのも胸が痛く、テントを建てるのもしんどい。設営と同時に転がりこんで、つぶれた。沈没シーンをカメラに収められるのにも、抵抗する気力は無かった。

1時間くらい寝て、復活。雪崩ビーコンをいじり、山座同定を楽しみ、春山の午後、平和なひとときだ。苗場山が巻機のかなり右に見えるのは意外だ。日暈がかかって春らんまん、天気図では明日午前中くらいまで天気はもちそうだ。

5/3 兎岳 4:51 - 6:49 日向尾根分岐点 7:01 - 7:12 中ノ岳 - 8:45 日向山 9:02 - 10:53 十字峡 - 12:37
野中 = 六日町

朝一パワー(お帰りパワーってやつかも)で中ノ岳へはラクラク。上空は一面の雲、苗場、巻機はガスに包まれている。天候悪化は時間の問題と思われた。

1.5Pで日向尾根への下降分岐点、そのころにはすでに下方から雨粒が吹き上がり、上方からは小雪が舞ってきた。食糧、地図、カメラくらいを持って頂上を往復する。

頂上からは雲間に越後駒、荒沢岳、兎岳、そして下ってゆく三国川方面を望める。荒沢岳は雲を突き抜けてすっきりと立ち上がっている。駒は決して隣の山でなく、うねる山並みの向こうだ。明日の天候不順がわかっていながら、ぜひとも行きたい。

日向山に向けて下る。雪庇に気を付けさえすれば、雪の上に足を投げ出しさえすればよい。あっという間に高度を落とし、主稜線ははるか高くにある。さらに下り、やがて雪も消えた。そろそろビーコンもOFF。こぶしの花が咲き、ぶなの若葉ごしに雪解け水が流れ落ちるのが見える。それにしても豪雪地帯の木々は偉いものだ。彼らはみんな下向きに生え、そのあと、幹を上方に湾曲させている。しなやかな体を持ち、雪の重みに耐えて冬を越すのだ。だからこの季節は気をつけて歩くべし、でないと足元から幹が跳ね上がり、パーンとぶつかられる。

10:50、十字峡、ここからはドライブ客が頻繁に通るアスファルト道をとぼとぼと歩く。目をつけていた露天風呂は故障中、東京までクサイ体で帰ることになりそうだ。バス停のある野中では、八重桜が満開で、こいのぼりがゆうゆうと泳いでいる。代かきも始まり、5月だ。バス停には12:37着、残った水で足を洗ったり、残り食糧をザックでつぺんに持ってきたりしながら、1時間ほどバスを待った。

今回の山行では、越後の山の神秘と奥深さ、その大きさを実感した。これらは、裏返せば、恐ろしさそのものだろう。けれど、それだからこそ、計画達成の充実感は大きい。(今回はむしろ安堵感のほうか?)これぞ日本の山、そんな山旅ができた。

【本記録は、山と溪谷2000年8月号に掲載されました。】

9907 奥多摩/WC：日原川巳ノ戸谷

日程：1999.7.20 参加者：江川，尾崎

7/20 東日原 7:55 - 入渓点 9:10 - 巳ノ戸谷出合 9:20 - 大滝 9:30 - 孫七窪 11:50 - 尾根 13:55 - 鷹巣山 14:45 - 東日原 16:20

年 2-3 回程度しか山に行っていない私には、奥多摩周辺での日帰り程度の沢登りはとりかかり易く、暑い夏の時期ならなおさら良い。ということで、加藤先輩と尾崎君と、それぞれに忙しい合間をぬっての祝日日帰り山行とあいなった。しかし残念なことに、加藤先輩は都合が悪くなりキャンセル、さらに明けたはずの梅雨空も朝方ははっきりしない。

バスで東日原まで入り、1 時間ほど日原川沿いの林道を進む。八丁橋をすぎてしばらくしてから、かすかな踏み跡をたどって、川までくだる。近頃の雨がちな天気のおかげ日原川の水量は豊富で、太もも程度までつかりながら徒渉して、巳ノ戸谷出合に到着。

薄暗い谷を進むと、ほどなく立派な爆音を響かせる大滝が立ちはだかる。直登は全く無理で、しばし見物ののち右手から高巻く。踏み跡は大変明瞭で、このルートのポピュラーさをうかがわせた。

このあとは、ゴルジュの連続となる。3 - 4m 程度の滝をいくつか越えた後、6m の滝。水量も豊富でちょっと簡単そうではない。左手にいくつかハーケンが見えるが苦しそうなので、ザイルを出して尾崎君が空身で登り、無事クリア。

そこから先は、次から次へと数メートル程度の小滝が続く。気温が上がってきたこともあり、シャワータイムを楽しみながら進む一方で、取り付きにくい滝には明瞭な踏み跡の巻き道もあり、初級者にとってはとても気のきいた沢である。孫七窪でゆっくりとランチをとったあと、30 分ほどワサビ田上の二俣に到達し、水はおしまい。

ハーネスを外し、左手の大クビレ沢をつめると、予想していたヤブこぎは全くないままに、30 分足らずで尾根に到達。

あとは鷹巣山を越えて東日原へ。天気もよくなってきたので、日原川の川原で一休みしてから帰途についた。

水量が多かったが、ヤブこぎもなく、手ごろ感のある気持ちの良いルートであった。

(江川 記)

9908 夏山合宿 南アルプス南部/WC：兎洞～兎岳

日程：1999.8.13～15 (+16,17) 参加者：山野 加藤 上野 高橋 尾崎

今年の夏山合宿は、人が少なそうで手ごろな沢(毎年そうかも)ということで、南ア南部の沢を捜し、遠山川水系兎洞を見つけた。遠山川といえば、ヒルはたくさんいそうだし、しだ系もいっぱい生えていそうで困ったものだ。兎洞というのもさえないネーミングだ。けれどもこのマイナーさかげんに加え、今年はうさぎ年、GWに続く兎岳第2驛。南ア南部核心部縦走の魅力も手伝って、早々と目標山域は決定した。

8/12 平岡 8:25=9:30 兎洞出合 9:50 - 13:26 二俣 13:44 - 14:43 幕営

飯田線平岡駅。長野県の最南部、天龍村だ。夜行組を待って 8:20 集合。予約していたタクシーに乗り込み、本谷口を過ぎるといよいよ山奥に分け入る。50 分ほどで兎洞出合の弁天岩に着く。

出合では巨大な砂防ダムの建設が行われており、奥地までの開発を見せつけられた。工事現場を肩身狭く通過し、そのすぐ上流で沢たびに履き替えた。さっそく溯行開始だが、いやに水が少なく、川底には黄色っぽい苔が生えている。

ヒルにやられるかもしれないと、体じゅうを気にしつつ、森の中の流れを歩いていく。左岸高くには光橋からの林道が延びているのが時折見えて、幻滅の感あり。川原が急に明るく広がり、突如として堰堤が現れた。管理のおっさん付きの取水堰であった。左の柵を開けてもらい通過した。

ここから、水量も流れる音もいよいよ沢らしくなる。しかし、左岸一段高くには、いまだに林道が通じているようだ。岩はいまだに苔でぬめっているものが多い。幸い、吸血ヒルのお出迎えは受けず。ヒル対策の塩を、軽量化と言って持ってこなくて正解だったようだが、まだまだ希望的観測はいけない。山への期待は往々にして裏切られるものだ。背中のおせもが痛い。レストごとに水に浸かってはウォーターライダーといって戯れる。

幕営予定の 30m スダレ状滝には達していないが、テン場としてはなかなか良さそうな場所を発見。焚き木は豊富、増水しても心配なし、おまけに空は夕立ちそう。レスト、ということでザックを下ろすが、CL 以外誰もが今日はここまで、と考えていたことだろう。対岸には 12m ほどの一条滝が美しく、天気も心配なので結局ここを初日の泊り場とする。

テントを張るより焚き木集めに精を出す。さっそく火を起こして服を乾かし、平和に過ごす。山野さんが、枝を釣竿にして岩魚釣りに出かけた。天気図と夕飯が完成し、山野さんは岩魚一匹を釣って戻ってくる。まさか釣れるとは。はらわたを取り、たき火で塩焼きにする。これぞ本物の遠赤外線グリルだ。骨まで食べた。

南岸沿いの熱帯低気圧の動きが気になるが、今日は快晴だ。深山の闇に包まれながら、真っ赤

な火を囲み、ゾロアスター教徒と洒落込もう。すばらしいことに、今夜はペルセウス座流星群の極大日。ほうき星が天空をかすめ、遠雷だろうか、空が時々紫色に光る。

8/13 幕営地 5:55 - 6:46 奥の二俣 7:06 - 10:15 兎大滝上 10:37 - 14:15 立俣尾根 - 16:08 兎岳避難小屋

薄暗いうちから、残っていた火種を使って火を起こす。今日も天気は上々。

冷たそうな水だが、6:00 前には出発する。岩の上でザックを枝に引っかけてバランスを崩し、下手にふんばるより飛び込んじゃえと、朝っぱらから全身ずぶぬれに。左岸に2本、スタレ状滝を見送り、川原歩きが続く。奥の二俣で右へ入り、徐々に傾斜を増していく。

やがて両岸狭まり、ゴルジュとなっていよいよ核心部へ。ついに行く手は2段70m「兎の大滝」に阻まれる。あまりの落差、水墨画的な自然の造形美に不可思議を感じる。下段はハングしており、直登の可能性はまずない。少し手前、右壁草付きバンドを斜上し、その上からザイル登攀となる。はじめの一步、少々かぶり気味の岩を乗り越え、外傾して高度感たっぷりの斜面を右上へトラバース気味に登る。驚いたことに、その上からは樹林の中に踏み跡が続き、小尾根を乗っ越して枝沢から本流へ下った。難所を越えたという安心感はあるが、あっけない。でもそんなにシビアな沢はヤダよ。その上流には美しい滑滝が連なり、花崗岩の白く明るい溪相は、甲斐駒の尾白川本谷を思わせた。(写真で見ただけだが。)チムニー状の12m滝は、とげとげアザミがたくさん生えた左斜面から巻く。ちょうど何かをつかみたいところに生えていて困ったものだ。

時間を忘れて楽しい溯行だった。しかし、あらためて時計を見れば、針はすでに12時を回っている。兎岳を越えて百間洞まで行くのは難しいのでは？右手上方に岩尾根と岩壁が見えてきた。おそらく兎岳の斜面だろう、頂上はまだあんなに高いのだ。沢は3つ又状になり、立俣尾根にいちばん早くつめ上げられそうな真ん中に行く。おそらく戦争中のものだろう、飛行機エンジンの残骸が所々に落ちている。

登りついたところは、水さえあれば桃源郷。しかし、エンジンの残骸はここでも見られる。草原に転がる遺物　　なにか「ラピュタ」を思い出す。こんなところで、「戦争」を感じるとは。

さて、ここからも一癖ありそうだ。深いやぶこぎは必至...ところが、獣道かもしれないが、幸運にもしばらくの間踏み跡があり、これを拾いつつ登る。いったん休憩した後だった、いよいよと言うか、すべてが狂い始めたのは。今思えば、踏み跡を見つけて喜んで気ィ抜いている間に、雲は厚くなり、空は黒くなっていた。その頼るべき踏み跡もハイマツ帯を目前にしておじけづいたか、左折してどこかへ消えてしまう。適当にトラバースすれば、うまく縦走路に出られるか??、いや世の中そんなに甘かぁねえ、やっぱここはセオリーどおりに行くべきでしょう。

背丈没するハイマツに突っ込む。そうこうしているうちに、雨が降り始め、風も強まる。ただのわか雨とタカをくくっていると、大粒の本降りになってしまう。おまけに雷も鳴り出して、

けっこうやばい状況だ。時はすでに 15 時近く、今日は兎の避難小屋止まりだな。雨具をつけてひたすら高い方向へ。

ようやくと頂上に達しても、カミナッていて一目散に直下の避難小屋まで駆け下る。ガスが濃く、すぐ近くまで来て初めて小屋とわかった。それとも荒廃しすぎているせい？ 汚い小屋でも小屋テンすると案外快適、ところが夜中、ネズミに食糧食われるの、便所はウジが湧いてるの、ここに泊まるのは勧められない。

8/14 避難小屋 6:53 - 9:46 百軒洞露营地

今朝も雨。動きの遅い熱低のせいで、悪天は長引きそうだ。水場が無いので今日はとにかく百間洞まで移動する。2P 半で到着し、その後の行動をどうするか頭を悩ます。

結局、山野、上野両氏は大雨の中、大沢渡へ下山し、3 人が明日の晴天を期待して残留した。我々はテント内でウダウダしていると、雨あしはますます激しくなり、下山した 2 人のことが気がかりになる。後で聞くと、大沢度の小屋では焚き火で暖を取れて助かったそうだ。ところがそのうち、他人の事どころではない事態がやってきた。

テントの床がぼっこん、ぼっこんと波打つ。水はけの良さそうなところを選んだつもりが、濁流は僕らのテントをめがけて身をくねらせる。そのうち雨も弱まるよ、これまた余裕ぶちかましていると、気がつけばザックの下は満々と水をたたえた貯水池が完成している。こうなってくると、もう天と地の間には汚いもんなんて何もない。今回唯一のタオルは雑巾に化け、食器はバケツに成り下がる。一人は外へ出て、土木工事を楽しむ。外堀と内堀からなる(?)、立派な放水路のおかげで洪水は治まったが、すべてのものの含水率は 100%を越えている。沢登り用完全防水パック(ザックインナー)は、単なる保水袋に。下山後の着替えだけは死守しよう。

夕方、熱低はいまだに北陸方面でうろちょろしている。雨はいっこうに弱まらず、夜中にはパンツまで浸水してきた。

8/15 百軒洞 5:50 - 8:15 赤石岳 9:18 - 11:06 荒川小屋

台風一過、満天の星空を期待してテントから首を出す。がっくり。

赤石山頂で晴れることを願い、縦走路に行く。いったん空が青みを増してくるが、またすぐにガスが濃くなる。風は依然として南東よりで、熱低の影響圏内のようなだ。やっぱり期待しちゃいけませんねえ。

結局、2 度目の赤石もガスガスだった。加藤、高橋両氏は椹島へ下山、尾崎一人が残留する。この天気、悪沢を越えて千枚小屋まで行く気になれない。右腕に風を受けながら 3000m の稜線を北上。大聖寺平に下るころ、いくぶん空気が乾いてきた感じで一瞬見通しがきく。

それでも、すぐに雨となり荒川小屋で行動打ちきりとする。まだ 11 時。

一人テントは暇で、寝袋乾かしに精を出しても飽きる。ラジオによると、丹沢の玄倉川の鉄砲

水で人が流されたらしく、一方で終戦記念日を伝えている。暇で、食べる以外やることはない。あー、快晴のテン場を期待したのに。夕方になって、風向きが西よりとなり、荒川岳の斜面をガスが降りてくる。明日の天気確信する。

8/16 4:00 荒川小屋 4:16 - 5:31 赤石岳 5:37 - 6:45 荒川小屋 7:25 - 8:44 中岳 8:58 9:59 悪沢岳
10:23 - 11:22 千枚岳 11:32 - 15:13 二軒小屋

4時。満天の星空。頭上に瞬くカシオペアが北頂を指す。テントを飛び出して赤石岳にひとっ走りだ。山頂にかかる笠雲が朝日に照らされ、天候回復がほんものでないことを暗示する。北北西には巨大なカナトコ雲、「やっぱりラピュタは本当にあったんだ!!」なんちゃって。あれが、いまいましき熱帯低気圧の正体である。熱低に向かって半時計回りに風が吹き込む。西風に流される雲に朝日が射しこみ、「ブロッケン妖怪」が見え隠れする。北北東には、悪沢岳のブラックフェイスが雲海をつらぬく。

さて、夏山気分を味わったことにして、とっとと帰る。

荷物を回収し、荒川岳への登りにかかる。たなびくガスの間に青空がすきとおり、頂稜は高い。だが残念なことに、頂上では再びガスに包まれ、赤石岳方面の展望も裏切られる。期待しちゃだめだったのに！雨混じりのなか、悪沢岳を越え、千枚岳手前のやせた稜線を進む。

ここからは、標高差約1500m、千枚東尾根の下降に入る。かなり気が重い、リズムカルにステップを刻み、確実に下っていくことができた。降りついた二軒小屋では弱日が射し、ようやく物を乾かすことができる。

長かった合宿（といっても今は1人だが）も残すところあと1日、明日は気楽に峠越えすればいい。

8/17 二軒小屋 6:43 - 8:17 転付峠 8:50 - 12:46 田代入口 14:29 = 身延

相変わらず山の上は暗く、ガスっている。峠まではだらだらと思った以上に長い。転付峠頂上からは、富士山がでかい。関東は晴れているようだ。

あとは、知っている道を下ればよい。途中で休憩も十分に取しながら、田代川第一発電所へ到着。ここからは舗装された林道歩きとなり、ちょっと辛い。残りの数百mまで来るが、本当に先が見えると長い。合宿前のことから、今までを振り返りながら歩く。川原でオートキャンプの人もいる。あんなことやっても充実しそうでないなとも思えてきた。対岸にはフォッサマグナが「新倉の大断層」となって姿を表す。右手山腹にはまん丸のつぼみがたくさんあり、アジサイの一種のような花もある。帰ってから調べたら、タマアジサイだそう。

風呂もないので川原で汗を拭き、着替えてバスを待つこと1時間半。ダンプの飛ばす道路わきに銀マットを敷いて寝た。奈良田から来るバスに乗り、身延、甲府を経由して帰宅。

9910 北アルプス南部/VR：明神岳東稜

日程：1999.8.25～27 参加者：西原 尾崎 辻野（京都大）

8/25

最終新島々行きで集合，さっそく銀マット敷いて駅寝。

8/26 新島々4:00=5:00 上高地 小梨平 5:32 - 6:05 養魚場 - 7:54 宮川コル 8:07

- 9:26 ひょうたん池 9:51 - 12:10 ラクダのコブ - 15:40 明神主峰 15:59 - 18:14 四峰

3:00 ころ，早くもタクシーに誘われる。隣りの2人組と5人相乗り，バスより安い破格の値段で一路上高地へ。純粋な山で上高地へ行くなんて。というのは，上高地の環境汚染調査をやっていて，，，だからタクシーを使うのもちょっと複雑な気分だ。けれども，この判断が今後すべてを左右することになった，といっても過言ではないだろう。

5:00 上高地，バスより1時間早い。水を汲んでそそくさと出発。明神の養魚場裏からひょうたん池をめざす。最初の小川を渡る木橋は，2本の丸太のうち1本が落ちていて，残る1本は先細り，しかも最後のほうは滑る。この山行の今後はいかに？

ルートは少しづつ右側へ上がっていくはず，とルーファイしながら下宮川谷のガレをつめていく。左岸に赤布が3つばかり結んであり，そこからガレを離れる。草むらに隠れているものの，しっかりした踏み跡を見つける。これをたどって宮川のコルへ急登していく。宮川のコルからは，上宮川谷のガレをトラバースし，草むらを分け，灌木を漕ぐ。左側の岩壁には遭難者を悼むレリーフが3つ，沈黙しながらも自らの存在意義を主張している。ひょうたん池は近くに見えるようではなかなか到着しない。この辺り，冬は雪崩事故が起きている。植物もたいして生えておらず，地形的にも誰が見ても雪崩れそうだ。

その名とおりの形をしたひょうたん池のほとり，一段上がったテン場跡地でしばしの休憩。行くて明神東稜を観察する。急な斜面は一見するとかなり困難そうだったが，よく見るとルートが読めてくる。そして右奥には前穂の岩峰群が雲間をかすめる。背後を振り返れば，常念，蝶の穂やかな山稜，眼下には梓川。

ひょうたん池を過ぎると踏み跡はさらに細くなり，いよいよバリエーションムードが高まっていく。この尾根上でも雪崩事故が起きており，おそらくこのあたり，急登が始まる前であろう。ラクダのコブまでは草付を攀じり，ハイマツに全体重を預け，3Pで着いた。

この荒涼，殺伐とした風景。ラクダのコブからは真っ正面に明神岳バットレスが立ちはだかる。その左には明神槍こと明神2峰が高さを競い合い，5峰へ向かって険悪なピークを連ねている。あらためてバットレスを観察すれば，おそらく3ピッチの登攀となりそうだ。1ピッチ目は衝立状の岩の左の草付，次がスラブ状一枚岩，3ピッチ目がバンド左上。そうしているうちに，俄かにガスに巻かれ，バラバラと雨が降り始めた。ピンチ!!これからが核心部というのに！

上下雨具を付け、バットレスに取付く。はじめの草付は、残置ロープがあり、ガスっていて高度感もないためか、ザイルの必要性は感じない。けれど雨がけっこう強く、これからシビアになりそう。視界が悪いため、ザイルで確保を続けてスラブ状岩壁の基部まで行く。右側凹角から西原のリードで突破。上部はホールド、スタンスが小さく、そして間隔が広く、少々苦労した。幸い、雨は本降りにならず、ときおりバラバラと降る程度だったので、雨具ズボンをつけている岩を登りにくいし、ハーネスは『しゃかいのまど』になってしまうし、というわけで雨具ズボンを脱ぐ。これより上のバンド左上は、グズグズ岩の積み重ねで、あまりにも不安定だった。右寄りのハイマツ帯の縁からザイルをつけてまわりこむ。このガラガラ岩の堆積、そしてなぜか、どこからともなく救急車のサイレンが鳴り響く。自分1人、気のせいだろうか。上高地を除けば、麓の町までもう1つ山があるのに、気持ち悪い。(あとで話したが、サイレン音は3人とも聞いていた。上空の風に乗って山の上で聞こえるのだろう。)

ようやく安定した岩となり、いよいよ頂稜にさしかかる。左手に流れるガスは頂稜縦走の困難を嘲笑い、その向こうにそそり立つ明神2峰は曇天のもと無気味に我らを待ちかまえる。正面に

は護衛兵^{ジャンダム}を従えた奥穂高の巨大な岩塊が天を割り裂き、吊尾根、前穂、そしてこの明神主峰まで、岩稜がかるうじてつながっている。遭難者の魂がうようよしている。

明神頂上 15:38 着。時間的にもう遅い。雷が来るかも。さあこれからどうする。ここにはきれいに整地されたテン場がある。けれども、天候悪化は時間の問題だ。まだ悪場は終了していない、安易なエスケープもしたくない。今日視界がきくうちに、何としても2峰は越えよう。行動できるのは暗くなるまであと2時間。それだけでいい。行動食食って 15:59 発。



明神 峰を背に・・・撮ってすぐ出発する

2 峰の登攀。左、宮川谷側は『日本のクラシックルート』の写真よりも切れ落ちており、昨年の地震で崩壊したのではないだろうか。おりしも、ガスに巻かれ、西からの強風と横なぐりの雨がたたきつける。ルートが東側でよかった。しかし、ビレイする手は凍え、ズボンは濡れる。岩は4級マツくらい、これを越えてもまだまだ厳しいのでは、悲観的気分、泣きたい気分。

2 峰頂上からは、稜線はかなり穏やかになり一安心。けれど3 峰はとても頂稜上を行けない、行く気力もない。悪天の中、その狭くでこぼこしたコルでテントを張るか、岳沢側を巻くか、3 人各自準備した資料を読む。この天気ではルーファイが心配だが、慎重に巻いてみることに決定。行ってみれば、テン場やデポ跡があり容易に3 峰を越えた。ここでは張らない。今日、まだ視界があるのを最大限生かそう。残るはあと約40分。

3 峰から急下降。真西へ延びる枝尾根に入り込まないように注意。運良く、視界が一瞬100m弱まできき、左(南東)方向に4 峰が見わたせた。もうあそこには岩らしい岩はない、トレースもばっちり付いているではないか。よかった、なんとありがたいことか。『Rock & Snow』によれば、4 峰頂上にテントが張れるようだ。さああと一頑張り、気を緩めるなよ。慎重にクライムダウンを繰り返す。

4 峰の緩い登りにかかる。長かった今日の最後の一步一步を、焦らず着実に進む。テントはどこに張れるだろうか、載っていた写真では岩陰のようだったが。頂上らしきところを過ぎ、岩をまわりこむ。よっしゃ！ここだ!! お疲れ様!!! 18:14 明神岳4 峰頂上。

速攻で設営、中は暖かい。その時外は暗雲が流れ、穂高連峰は黒く鋭く、闇に没しつつあった。

8/27 四峰 6:52 - 8:00 五峰台地 - 10:50 岳沢登山道 11:00 - 11:45 河童橋

4 時半、かなり風雨が強い。山の天気は崩れは早いというが、予報よりも半日早い。逆に、今日午後には回復してくれないか、かすかな期待を抱いて5時の全国天気概況を聞く。シュラフも出しっぱなしで停滞モード。日本海に横たわる秋雨(?)前線のせいで、2~3日は天候回復は難しそうだ。

ここにも仕方ないようだ。幸い風雨は断続的で、収まった瞬間について撤収、ガスガスの中を前進する。視界は20mくらいだろうか。こんな中5 峰への登りかえしなんて冗談じゃない、しかも5 峰は、東稜から見た感じでは難しそうだった。『岳人』によれば、残雪期は岳沢からトラバースできるらしいが、下る方向に注意が必要。岳沢側へ別れる踏み跡を見つけたが、すぐにやぶに没した。あらためて稜線を進み、右下へのトレールを発見。今度は古い赤旗が残っており、确实だろう。地図と磁石もGoサインをくれた。5 峰のピナクルが左上方にかすかに見え、めざす5 峰台地はまったく見えない。雨、風、ガスの世界、ただ自らの知力、体力、気力すべてをそこに注ぎ、動物的感覚(勘覚?)を研ぎ澄ませば、ルートを間違えても、登り返しも何ら苦ではあるまい。

なんてカッコよさそうなことを考えて、気が緩んだ。踏み跡は忽然として消え、いや、ハイマ

ツと砂礫の中にいつのまにか溶け込んで、地形的にも尾根を下っていない。方向もやや西よりだ。このまま進んで左へまわりこむのか。だがこんなときは基本的に忠実に、引き返すべきであろう。

4~5分登り返す。さっき下ったところに踏み跡は確実にあるのだが。けれど気がつくと、ハイマツの中へ徐々に分かれていくか細い踏み跡があった。じつはさっきもこれに気付いていた、でも平行していると信じ込んでいた。

方向修正してその踏み跡をたどっていると、一瞬ガスが薄くなり、前方に台地を確認できた。なんて幸運、この方向を失うな。右下へ流れるガレに惑わされぬよう、慎重に下る。

冬期の幕営跡が残る5峰台地は、真ん中のへこんだ凹地状で、25000 図でもはっきりと確認できる。ルートは岳沢よりの小尾根上に続いており、凹地の中を下るとハイマツが深い。雷鳥は早くも冬装束に衣替えを始めている。真っ白な翼を広げ、赤い眉毛がチャームポイント。滑空シーンは山の神の使者そのものだ。森林限界まで踏み跡を先行してくれた。この厳しい状況で、こうして僕らを導いてくれる、大自然は何に対しても平等なのだ。そして、この3000mの稜線で営みを続けるすべての生物に敬意を表したい。

樹林帯に入り、ようやく一息つく。もうほとんど心配ないが、これから2ヶ所ほどの懸垂下降があるかもしれない。やっしまえば一番手っ取り早いとはいえ、ザイルはもうたくさんだ。結局、ひと蹴りすれば崩れそうな灌木混じりの細い尾根からクライムダウンすることができた。

長い下りもようやく終わり、岳沢登山道 NO.7 地点に合流する。明神南西尾根を下る場合、森林限界から下もルーファイ注意。古く、間隔が広いが、赤布が確実に付いている。

一般路では、ケータイで話しながら歩いて、休憩時には缶ビールを仲間に振る舞うおっさんに出くわす。ギャップに唾然としながらも気にしちゃあこっちの負けだ。よく整備された道はなんて歩きやすいのか。まるで動く歩道か、軌道上を重力にまかせて転がっているようだ。

1P 弱で河童橋に着く。まいど通りの混みようだが、なんだか生きて帰ってきたという感じだ。相変わらず雨で、明神主峰はガスに隠れているが、5峰とその奥くらいまでは見える。あんなところでテントはってる奴がいる・・・なんて、昨日夕方、上高地の望遠鏡から見られていたかもしれない。

バスターミナルで各自思い思いに帰りの支度をする。運よく雨はやむ。もうこんなどろグチャの靴は履いてられない。3人とも1000円出してサンダルを買い、雨具や靴を水道で洗う。今度は上高地温泉ホテルへ。

穂高連峰のバリエーションをやった。楽しかった、よかった、また行きたい、そんな感覚はまるでない。ただ、使い切り、尽き果て、心身ともに何も残っていない感じ。けれども、これが下山後1日2日と経つうちに、大きな満足感、達成感という喜びに変わっていくだろう。次は、前穂北尾根～明神岳の継続か!?

9913 奥多摩/WC：入川谷布滝谷

日程：1999.9.5 参加者：岡田 江川 尾崎

突然、沢に行こうということになって、7月以来めぼしをつけていた入川谷布滝谷へ決定。青梅線古里駅から直接歩いて入渓可能で、登攀的要素の大きい引き締まった沢だ。

9/5 古里 7:50 - 8:36 入渓点 8:50 - 9:44 布滝谷出合 10:00 - 12:25 F4 上 12:52

- 14:16 赤杭尾根 14:35 - 16:54 古里

堰堤上、林道終点の入渓点に着くと、意外にも川原はオートキャンプ場と化していた。何だこりゃあ、ぼくも仲間に入れてもらおうかあ。冗談言ってごまかしつつ、沢タビ履いてハーネスとメットをつける。あまりにも場違いな感じだ。すぐそこには釣人がおり、最初っからトラブっても不愉快なので、左に見つけた踏み跡をたどる。

堰堤をいくつか越えて、川原歩き 1P ほどで布滝谷出合に着く。奥には 13m スラブ状直瀑、布滝が見える。最大の難関はこの布滝で、こいつをどうやって越えるか？ガイドではすぐ上流の涸れ沢から高巻いているが、ルーファイやルートそのものがいやらしそうで敬遠したい。滝の基部まで近づいてみると、落ち口の 2m くらい下、右壁にテラスがあった。そこまでは容易に登ることができ、ほんの 3m くらい岩を登れば布滝は越せそうだ。よし、いける。

だが実際ザイルをつけて取付いてみると、けっこうかぶり気味で高度感もあり、厳しい。唯一頼れると思った枝は枯れ枝で、リードで体重を預けるにはあまりにもチャレンジング。ためかも、けど、ここで敗退して下り直して高巻きっていうのも避けたい。何度か挑んで、枝にも頼らず、突破する。念入りに中間支点を取り、次に斜め 45 度(?)の一枚岩をバランスでやり過ごす。けっこう悪い。ここで滑ったら空を飛べる、ほんの一瞬最初で最後！その上の岩角で支点を取ったものの、ザイルが半分に達してしまい、もう少し下で支点を取り直す。

やぶをくぐり、続くは豪快シャワークライミングの 3 連チャン。水流を頭からまともに受け、そして水圧のこわさにビビリながらも、滝、釜、滝、釜、滝。最後はさすがに筋肉が冷え、思うように動けない。こらヤバい。

核心部は終わったが、沢全体が滝のように急だ。水流がなくなると、両側が切り立ったルンゼ状となる。急なうえにもろい岩だ。途中から右斜面に逃げて、赤杭尾根につめ上げた。

日曜日の奥多摩とは思えないほど静かな尾根道だ。秋の午後の平和なひととき。のんびり下った。赤杭尾根は静かで変化に富んでいて、川苔山からは鳩ノ巣に下るよりずっといいと思った。

9913 上越/WC : 魚野川南カドナミ沢

日程：1999.9.25～26 参加者：加藤，尾崎，星野，細田，
西高生(53期 阿部，鈴木，島田，54期 石塚，北爪)

この日は，西朋で沢に行く予定だったが，今年は西高では沢に行っていないということで，高校生も誘うことになった．前から行きたかった上越方面の沢だが，出版されたばかりの「上信越の谷 105 ルート」で見つけた土樽駅前の南カドナミ沢なら何とかなるだろう．

9/25 ===土樽 - 魚野川川原(幕)

高校生とともに出発する．昼下がりに土樽駅に着けば，歩いて 10 分もしない魚野川の川原にテントを張る．カドナミ沢出合の偵察と，ロープワークの練習をして 1 日目は過ぎた．カドナミ沢は 2 本めの小沢である．夜，加藤先輩が車で合流する．

9/26 発 5:20 - 9:15 右俣分岐 9:30 - 11:23 R 11:40 - 14:55 荒沢山 15:22 - 17:36 土樽

おそらく今シーズン最後の沢になると思いながら出発する（ところが 10/31 に奥秩父のヌク沢に行くことになる）．高校生もいて，いつもと違った雰囲気だ．ほどなくナメ滝が現れ，川原歩きにアクセントを加える．『カニのこてしらべ』といったところか．ナメ，小滝を快適に行く．やがて滝が現れ，2 つ目（おそらく 7m2 段滝）は左から水流を浴びつつ少々思い切りの要る登り．灌木で確保する．それ以降は見た目よりやさしく，ばしばしザイルを出して，どんどん登っていく．

少々荒れた感じで右俣を分けると F5 15m4 段滝である．左から巻くこともできるようで，後続のパーティは巻いて抜かして行った．さほど高度感も無く，水流左側を登る．最上部で高校生の確保にザイルを使用した．その後は問題ない楽しい遡行が続く．右手には，駅前の山といったイメージをはるかにしのぐスラブ群が開けている．支流を右にいくつも分けるうちに，本流もスラブっぽくなっていく．が，また樹林に入り水も涸れ，ルーファイが必要なところだ．トイ状のドロ壁やホールドの少ない涸滝が現れたりして，何ヶ所かでザイルを使用して飽きさせない...というより，地図での距離以上に長い．その後再びスラブとなり，足拍子岳への荒々しい稜線を見渡しながらか登高する．高度感もでてきた．

再びヤブに入るとすぐにか細い登山道に出て，左へ進めば岩場を越えて荒沢山に登頂．秋の陽がとてもやさしく満ちたりた気分になる．眼下には上越線の列車と関越を行く自動車がおもちゃのようで，登っている最中に見えれば目障りなものでも，とてもいい感じに見下ろせる．標高 1302m の頂上からは，茂倉岳がもっと高くに見渡せた．

カドナミ尾根の下りは不明瞭な道筋をたどり 2 時間．「上信越の谷 105 ルート」コースタイム 1 時間は短いと思う．全体として，高校生にはきつかったようで，反省．

9914 南アルプス北部/VR: 鋸岳～甲斐駒ヶ岳

日程：1999.10.8～11 参加者：岡田 山田 内田 尾崎

10/8-9 新宿 23:50 = 伊那北 5:30 = 戸台口 6:30 = 7:08 登山道 7:30 - 8:54 角兵衛沢出合 9:11 - 12:20 大岩下の岩小屋

連休前の夜の新宿駅。6番線ホームは相当な混雑ぶりだ。みな、今はなき急行アルプスに乗る人たちだ。我々がめざす鋸岳は、辰野、伊那、高遠、戸台経由の入山となる。やはり座ることはできず、立ち席のまま、列車は容赦なく発車していった。

ザックを横にしてその上に詰めて座り、「とりあえず最悪の状況からは脱出したな」。個人的には案外と寝ることができた。列車、バスを乗り継ぐ。戸台では北沢峠行きの人々があまりにも多いのに驚く。きっと鋸岳には10人くらいでも、甲斐駒、仙丈には400人、北岳にはざっと1000人くらいいるんだろ、なんて(ちょっと優越感に浸りながら)、いいかげんな冗談を飛ばす。

本当なら戸台から歩く予定だったが、川原歩き2Pがかかった。仙丈岳馬の背から丹溪山荘へ下る道のところで北沢峠行きバスを降りる。「最初っから下りっていう山も珍しいよな」。間抜けなことを言いながら、丹溪山荘に向けてスーパー林道から下っていく。寝むいーっ。降りついた所から戸台川の徒渉を3回。1回は裸足になる。さらに1回は落差のある飛び石をチャレンジングなジャンプでやり過ごす。石に苔が生えており、危うく転びそう。水は冷たく、流れは速い。もう秋だ、夏みたいに水と戯れたくはない。でも眠気が覚めた。

角兵衛沢へ入る。今のところ踏み跡ははっきりしており、心配はない。それにしても単調な登りで、ときおり対岸の山が見えたかと思うと、下ってきた南アルプススーパー林道はまだずっと上だ。樹林の中へ、ようやくガレが押し出してくる。そろそろ今宵をすごす「大岩下の岩小屋」も近いのではないか。所詮、このたぐいの期待はいともたやすく裏切られることを悟りつつも、今回ばかりは妙に気になる。がんばれ。

確かに右手には高低差100mもありそうな大岩が迫り、その下は草場が広がっていて植生的に水分がありそう。ここより上部は完全なガレ場で、見た感じではもう上に適地はなさそう。しかしエアリアマップ付属のガイド冊子によると、岩小屋はまだ上のようで、かんべんしておくれ。山田氏が偵察してきてくれて、岩小屋はやはりここだとわかると、ほんとに人間は勝手なもので、「時間も早いし、まだ行ってもいいのんなあ。

12:20 幕営。すき間から岩清水が滴り落ちる。隙間の位置といい、高さといい、ポリタンの大きさにぴったりで、まるで給水器だ。どこかにボタンがあって、押したら止まるかも。あとはひなたぼっこしながら昼寝するのみ。

10/10 3:35 幕営地 4:50 - 6:50 角兵衛沢のコル 7:10 - 第一高点 7:33 - 9:23 第二高点 9:55

- 12:10 六合目 12:31 - 14:23 甲斐駒ヶ岳 14:42 - 16:00 七丈小屋

星空のもと、懐電を頼りに歩き始める。すぐにガレ場に入っていく。場所によってはグズグズの岩礫をよじり、地形と地図を読み比べる。結局、右寄りに進めというガイドにもかかわらず、真正面、どちらかといえば左寄りへつき上げたコルが「角兵衛沢のコル」だった。途中2ヶ所ほど整地跡あり、きっとエアリアガイドにダマサレタ人たちが、水場もないのに仕方なく張ったにちがいない。

角兵衛沢のコルからは一投足で第一高点。日本中の山々がずらりと肩を並べ、オールスター全員集合である。さあ見とれてはられない。行くての岩稜は鋭角をなし、不気味な俯角で見下ろすことができる。小ギャップ、大ギャップの2つの切れ込みが深い。

岩稜を難なく下降の後、小ギャップへ懸垂下降。登り返して細かい岩稜を進む。「鹿穴」の上の、どこにも捕まることのできない一枚岩の下降は困難で、ルーファイミスに気づく。左下の巻き道を見つけて、鹿穴をくぐる。岩のトンネルの向こうには仙丈岳の雄姿。鹿穴からの下降は、落石の通り道となる急なガリーで、先頭を歩く身にとってはちょっと気分が悪い。絶壁をか細いトラバース道で通過し、大ギャップを下から巻く。(高橋先輩によれば、ここを稜線沿いに行くと第三高点で、その後長い懸垂で大ギャップの底らしい。)

草付きを登って第二高点。距離的には遠くないはずが、第一高点から2時間弱要した。秀麗な円錐形の甲斐駒ヶ岳は、今日中に越えるには遠く、高い。北岳は鋭角二等辺三角形をなして秋空を突く。今回、行動食を買ってくる暇もなかった。貧弱な物を口へ運ぶ。潰れてはみ出て、混ぜこぜの納豆。どうも臭いと思ったがいままでその原因に気づかなかった。山田氏が西高チックな物を食っている。「やっぱロールケーキなんか食べねえ」という残りを頂戴。美味いっす。

第二高点からは一転して平和な縦走路となり、2Pで六合目石室。秋のさわ風を受け、明るい花崗岩の甲斐駒を仰ぎ見る。そろそろ傾斜もきつくなり、眼前の頂上がいっこうに近づかない。ほんとに、見えてからが長い。

いいかげん百名山ハンターたちの去った午後の甲斐駒頂上で、南ア巨峰群に別れを告げる。やさしい陽光を背中いっぱい浴びながら、黒戸尾根の下降を開始する。この尾根がまた長く、七合目はかなり下方に見える。8合目にもテント村ができています。大武川赤石沢の奥壁に登攀した人たちのようで、10分ほどのところで水がくめらしい。

七合目のテン場で作った、「じゃが玉にんじんベーコン炒めのとろけるチーズかけ」なる、ありあわせ飯はダメモトだっただけに超うまだった。

10/11 4:00 七丈小屋 5:11 - 10:28 横手駒ヶ岳神社 = 葎崎

朝一で下山。というより、4時に起きたら5時に出発できてしまった。ぐんぐん下降する。黒戸尾根の道は、整備されて栈道やはしごが取り替えられている。笹平から横手駒ヶ岳神社の道へ入る。水場からの登り返しがだるい。実際の道は地図に記載されているのよりも隣の尾根を下っているようだ。やがて、八ヶ岳はずっとずっと高くなり、町の音が聞こえるようになった。緩やかな道を、そろそろ着かないかなあと思う頃、神社の裏に飛び出す。おつかれさまでした。

9915 奥秩父/WC：笛吹川東沢又ク沢

日程：1999.10.31 参加者：内田，尾崎

天気はよく、紅葉が最高に美しいが、朝はなんと言っても寒い。遠慮なく水に入ってしまうがあとから後悔する。しかし登っていくうちに気温は上がり、なかなか快適な日和となる。甲武信岳への登山道を横切って、ナメ滝にうつる紅葉に酔いながら 流れる水に映る秋空と色づいた木々・・・本当に目が回りそう、適度な小滝を気持ちよく登りながら進む。突如現れる砂防ダムに気が滅入るが、気を取り直して大滝に行き着く。3段 260m とか。下段は困難はまったくない。中段はちょっと緊張しながらもノーザイルで無事クリア。ここでいい気になって突っ込んだのが災いして、高度感のある上段ではヌルヌル岩に進退窮まる（窮まったのは上段だったと、思う）が、スリングの助けを借りて脱出。右から巻いた。

滝の上からは富士山が大きい。焚き火をして休憩。やがて左にガレを見ると、奥秩父の原生林の中へ導かれ、踏み跡をたどって縦走路へと出る。足どり軽く甲武信岳を往復して、戸渡尾根を下降した。

9916 南アルプス北部/VR：弘法小屋尾根 冬山偵察

日程：1999.12.4～5 参加者：岡田（記），尾崎

天気：4日 晴れ 5日 曇り一時雪、のち晴れ

参考文献：岳人 1988年3月号

タイム：夜叉神峠(6:35)...野呂川隧道(9:30)...出合の吊橋(11:30)...作業小屋
(12:50)...登山口発見(13:30)...幕営 1840m 付近(15:00//6:30)...三角点 2386m
(8:45)...テン場(10:45)...野呂川林道(13:45)...夜叉神峠(17:20)...芦安(18:55)

年末の西朋冬合宿の偵察に同行させてもらった。私は年末の海外登山のため、新調したプラブーツの足慣らしも兼ねさせてもらった。弘法小屋尾根は間ノ岳の東面に突き上げ、尾無尾根とともに比較的登りやすいバリエ? ションルートと言われる。アプローチには荒川発電所の取水口の東電巡視路を利用するので、その状況調査と下部ルート確認が目的。鷲ノ住山から対岸の野呂川林道へ急降下。対岸の登りでルートを誤り、不安定な崩壊箇所に出ってしまうが、何とか通過できた。

弘法小屋尾根へのアプローチとなる荒川の巡視路（関係者以外通行禁止と書かれていた）を歩いて行く。所々崩れているものの、スリリングな栈橋梯子吊橋が整備されており、特に通行困難な場所はない。もっとも私は、1箇所梯子をくぐる所でザックが引っかかって苦労した。出合いの吊橋で右俣の沢を見に行くが、登れそうもなく引き返す。道なりに進むと尾根に取り付いて、良い具合に高度を上げていく。トラバース道に出た付近に作業小屋があり、先の進路を求めてしばらく迷った。取水口の上に踏み跡を発見し、これが尾根への登山口と判明。ようやく雪の上を歩くようになり、適当な場所で幕営。

翌日はテントを置いて、所々やぶと倒木のある尾根を 2386m の三角点まで登って引き返した。雪はうっすら積もる程度で少ない。下りでは2箇所ほど尾根が分かれる所があり、違う尾根に入りかけて戻る。テント回収後、往路と同じコースで下山。疲れた体には鷲ノ住山の登りが辛かった。そのうえ夜叉神からタクシーが呼べず、結局芦安までテクテク車道を歩くことになった。疲れたけれども、未知のコースをルート探索するのはなかなか楽しいものだ。アプローチは十分可能なことも確認できた。

（岡田 記）

9917 冬山合宿 南アルプス北部/VR：弘法小屋尾根～北岳

日程：1999.12.25～30 参加者：加藤 上野 内田 尾崎

早くもあれから1年たった。そう、吹雪の中、北岳トラバース道進入・中退をやってしまった去年の冬山からだ。あのあと本気で雪辱戦をやってやると誓ったものだ。しかしそれも時がたつにつれて次第に薄れ、いつしか夏が過ぎ秋を迎え、気がつけば1年経っていた。

さて今年の冬山合宿。南アルプス北部、間ノ岳東面、弘法小屋尾根が魅力的である。間ノ岳東面は、白峰三山の域内にもかかわらず、人影のうすいマイナー地帯だ。弘法小屋尾根は、ここ10年ほど雑誌などに記録も載らず、やりがい、手応えはとても大きい。本番のルートは北岳から池山吊尾根下降とし、意図せずとも昨年の雪辱戦を実行するかたちとなった。

まず、12/4～5に取付点と尾根下部の偵察を行い、エスケープによる往路下山も考慮して赤布を取り付けた。前年の反省に新たな検討を加えて、12/25夕方、いよいよ合宿本番を迎えた。

12/26 快晴

夜叉神峠ゲート 7:55 - 8:59 鷲ノ住山入口 9:12 - 10:26 対岸林道 10:40 - 11:51 北沢出合吊橋
12:10 - 13:07 弘法小屋尾根取付点 - 14:57 1850m 地点

夜叉神の長いトンネルを抜けると、行く手真っ正面に太く根張りのある尾根が間ノ岳につき上げている。これぞ目的の弘法小屋尾根である。登り気味の林道を1時間、そして鷲ノ住山から標高差400mを一気に下る。ああもったいない。いつ通ってもいやなところだ。

吊橋を1人1人渡り、少し登って野呂川林道のトンネル脇にたどり着く。ときおり、砂煙をもうもうと上げてダンプが行き来する。ここまで2P歩いたのに、これだからうんざりだ。公共事業だか何だか知らぬが、林道なんぞ作るから、半永久的に工事をしなくてはいけなくなるのである（これが本当の目的だったら怖い）。

本当に真っ暗なトンネルを抜け、荒川出合に達する。右折して、立ち入り禁止の標示のある林道へ入る。すぐにヘアピンを2つ過ぎ、やがて右下に荒川第2ダム、対岸に氷結した「けむりの滝」をみる。美しかったと思われるけむりの滝は、無残にも、下部が堰堤のコンクリートによってつぶされている。渡れない古い吊橋があったが、北沢横手道はどこにあるのかわからない。

ここから右岸の作業道に入る。沢に沿っていくらかのアップダウンを過ぎ、北沢出合の吊橋に至る。悲しいことに、ここにも砂防ダムを造るらしい。偵察時にはなかった測量跡が随所に見られる。

「一般者通行禁止」の札のかかる吊橋を、「おれたちゃ一般じゃねえな。」ということで渡り、道なりに登り始める。ここは弘法小屋尾根の末端にあたる。いよいよ、夜叉神からはるか谷の向こうに見えた尾根のたもとにたどり着いたわけだ。しっかりと整備された道はさらに続く。これは、

北沢と三ッ滝の取水口の巡視路と思われる。やがて変則十字路に至り、左は三ッ滝方面、真ん中は小屋があって行き止まりである。ここを右折して水平路となる。これは北沢横手道の名残だろう。南面は雪が解けているが、北面には雪が見られる。尾根をまわり込み、北沢取水口を見下ろす所が、いよいよ取付点だ。偵察時に付けたひとときわ長い赤布が、無言にも目的ルートの始まりを強調する。気を引き締め、スパッツを装着する。今日はここから350mほど登った1850m地点に幕営の予定。

すぐに急登が始まる。「道」は、過去にこの尾根を目指した先人たちがかすかに残すのみ。上野氏が足をつり、苦しそうだ。計画がまっとうできるか少し心配になる。

1850m 地点は、急登の尾根の中でも、本当に平らで、快適な幕営地だ。右手上方に、北岳が迫る。

12/27 快晴

1850m 地点 6:50 - 7:41 2100m 7:56 - 8:57 2250m 9:12 - 9:40 ころ 2385m 一等三角点 - 10:10 2410m 10:43 - 11:48 2550m 12:06 - 13:04 2650m 森林限界 13:29 - 14:15 2821m ピーク

東の空が朱色に輝き、山々は黎明に染まる。針葉樹林帯の細い尾根を急登する。積雪が足首くらいまでになるころ、2385.7m 一等三角点に達する。この一帯も緩やかで、雪も豊富。幕営地として最適だが、夜叉神峠から1日で到達するにはちときつい。

偵察の時はここで引き返した。雪はその時より増えている。弘法小屋尾根下降の場合、この三角点から下のルーファイに注意が必要だ。ここから左の尾根を下り、2320m で右、すぐに2290m から左、そして1950m から左に下ると1850m 幕営適地となる。さらにそこからは右に、尾根沿いに下れば取付点だ。

尾根は比較的緩やかになるが、緩急繰り返して高度を上げてゆく。左には農鳥岳、右には北岳、そして正面には木の葉越しに間ノ岳が近づく。さっそく双眼鏡で偵察する。稜線は雪が吹き飛ばされているようだ。ハイマツのやぶを過ぎ、尾根筋はいったん細くなる。ひざ下くらいのラッセルだ。岩の右手から雪をかき分け、急斜面を登りつめると、いよいよ展望が開ける。背後には富士が大きい。どこまでも青、白、黒の支配する世界。2550m 地点で休憩。

いつしか針葉樹林帯を抜け、ダケカンバ林の広い尾根を登高する。積雪はさらに増え、ひざ上くらいになる。森林限界は近いが、雪も一番多く、苦しい所だ。

森林限界に達したところで長めに休憩する。今日のシ場はどこにしようか。明日以降の行程を考えるともう少し進んでおきたいが、ここより上に適地はあるだろうか。まだしばらく尾根は広いので、あと1Pをめやすに進む。地衣状のハイマツ帯を登り、2821m ピークの広い頂上で幕営。これより先、尾根はいったん下りになり、細かいアップダウンがあって幕営は難しそうだ。雪割梅酒が最高にうまく、ラッセルで疲れた身にしみわたる。

12/28 快晴

2821m **ピーク** 6:45 - 8:11 2850m 8:32 - 9:50 2950m 10:14 - 11:04 3100m 11:19 - 11:29 **主稜線**
- 11:40 **間ノ岳** 11:46 - 13:21 **北岳山荘**

今日も快晴である。ルートはここから険しさを増し、急峻な雪稜となって間ノ岳の胸壁に吸い込まれる。いよいよ核心部の日を迎えた。ハーネス、アイゼン、そしてビーコンの電源を確認し、快適だった幕営地を後にする。

まず、ここからは慎重に下降する。いままでとは違って変わって、細かいピークが連なる。それらがしばらくは肩を並べつつも少しずつ高度を落とし、そしてその上にめざすべき尾根筋がそそり立つ。振り返れば、朝焼けの東空が徐々に黄色みをまし、ついに富士山の左手から一条の光が射し込む。御来迎だ。群青色に支配された山々は、瞬時にモルゲンロートの別世界となり、朱銀のスクリーンに4人のクライマーの姿が投影される。耳元に凍てついた微風がそよぐ。これだ。これぞ冬山！

やせたリッジを忠実にたどる。右下は垂直に切れ落ち、左側も急傾斜の小ピークで、ルートは虚空に消える。下方に向けて階段状の急な岩場が続く。出だしの一步がいちばん急で、しかも雪が岩に乗って非常に不安定なようだ。スノーバーとピッケルを雪に突き刺して支点とし、ザイル確保で下降する。距離こそ25mくらいだろうが、雪を払いのけながらの下降は緊張を強いられる。下りきったところが2935m ピークとの最低鞍部。ハイマツにセルフビレイをとり、2人目以降は簡易ブルージュックで無事下る。



モルゲンロートの雪稜を核心部へ

再び尾根を登りかえし、いったん平らになったところで休憩。目前にはいよいよ 2921m ピークが迫り、その向こうに間ノ岳の銀屏風が輝く。2921m ピークから小ピークを縫いながら、ゴジラの背のような尾根を快適に進む。ピークのどちら側を巻くか、それとも登り越すべきか、ルーファイが楽しいところだ。左下には、雪に埋まった細沢源頭カールとモレーン地形が広がる。アイスクリームスプーンですくったようになめらかな雪の斜面を目で追うと、いつしか頂上へ突き上げる。

このダイナミックな尾根もついに主稜線の山ひだに吸い込まれ、今にも雪崩れそうな急斜面となり、そのむこうに岩尾根が続く。ルートの確認を兼ねて休憩とする。岩尾根は左右 2 本並んで延びており、進むべきは右尾根のさらに右側、まだ日の射し込まない北側基部である。ここから標高差約 240m、弘法小屋尾根の核心部最後の登高が始まる。主稜線はその高度と強風を考えれば、かなりの寒さだろう。ピーコン ON を再度確認した。ピー、ピーという発信音がこの景色とともに脳裏に焼き付く。万が一の滑落や雪崩に備え、ヤッケを着込み完全装備で前進を開始する。急雪面を岩尾根基部をめざしてラッセルする。傾斜はますます厳しくなり、岩稜基部のシュルンド状のスカ雪は、ラッセルというよりも溺れているに等しく、間違えれば奈落の底へまっしぐらである。ラッセルを避け、いったん左上を試みるが、凍り付いた草付き急斜面をアイゼンの前爪とピッケルで這い上がる状態で、誰かぜったい落ちると思った、と上野氏は振り返る。急斜面を乗り越え、再び右の雪面を行く。間隔を開けて雪への荷重をなるべく小さくしながら。まるで 100m ダッシュをしたかのように息を荒げ、ようやく小尾根の上に出た。まだ急傾斜は続くが、一安心。それでも一歩足を出すごとに激しい呼吸を強いられる。

いったん休憩の後、一投足で主稜線に到達する。しかし、喜びは叩きつける烈風に吹き飛ばされる。北風の強さは並みたいていでなく、顔が痛くなる。風を除けられる所で熱いココアをごちそうになる。やっぱしこれだ。冬山ならではの贅沢。ザックはデポして頂上へ向かう。空身なので楽かと思いきや、強風にあおられそうでかえって怖い。真っ正面から冷たく容赦ない白色光が照り付け、寒風吹きさす雪尾根がその恒星を突き刺さんとする。碧青と白銀、太陽光線が視界を直射する世界。ついに間ノ岳の頂上に立つ。弘法小屋尾根完登！

厳冬の 3000m は、季節風が荒れ狂う。吹きっさらしで雪のない稜線を 1 時間半、北岳山荘へ向かう。とはいえ、冬期小屋から眺める平和な光景。あの吹雪は幻だったのか、それとも夢だったのか、正面には北岳が迫り、昨年引き返したトラバース道がくっきり見える。

これ以上他パーティが来ないのを見越して、今宵は小屋テン。快適な一り。夕方、相変わらずの強風だったが外に出てみた。北岳の右下に、地層が逆立つ八本歯のコルがひときわ目を引く。

12/29 快晴

北岳山荘 6:40 - 7:42 吊尾根分岐 7:59 - 8:17 北岳 8:39 - 8:49 吊尾根分岐 9:30 ころ

- 10:17 八本歯の頭 10:40 - 11:28 ボーコン沢の頭 12:05 - 13:07 2300m 13:23 - 14:13 1920m 14:25

- 15:35 あるき沢橋



弘法小屋尾根をバックに・・・北岳頂上にて

朝が来た。心なしか穏やかな気持ちで下山日を迎える。しかし、林道の整備された今日でさえ、南アルプスの山懐は深く、今日中に家に帰ることはできないだろう。

1Pで池山吊尾根の分岐点へ。空身で北岳山頂へ行く。去年よりも雪は少なく、直下の斜面には夏道が見える。

頂上の大展望は言うまでもない。無風快晴である。間ノ岳を振り返り、弘法小屋尾根をバックに記念撮影をする。さらに続く南部の山々も見渡すことができ、今年は南アルプスに何度も行ったことを思い出す。10月、鋸岳を偵察していた「ブッシュ」のお喋りおばさん2人組は、正月の鋸岳に来ているのだろうか。それにしても、鳳凰、甲斐駒、鋸はまだ秋山状態だ。

分岐点まで戻り、大休止の後、下山を開始する。昨年テントを張った岩陰もちゃんと確認できる。ここらへんの岩塔が昨日見えた八本歯の地層なのだろう。昨年懸垂下降した岩場は、両側が切れているものの、登りは簡単である。

ポーコン沢の頭へ。バットレスの大岩壁を振り返り振り返り、惜しみながらも下界を目指す。あの岩に取付くべく、一条のトレースが見える。冬の北岳バットレスか。弘法小屋尾根に続く我らのトレースも確認でき、感動のあまり歩を休める。あっ、人じゃないか、いや、違う。やは

り弘法小屋尾根は僕らだけの世界だった。双眼鏡を使うと、弘法小屋尾根のポイントポイントがことごとく確認できる。

雪は少なく、ゴールデンウィーク状態の尾根を池山御池へ。野呂川林道までがんばって下り、最後の夜を平和に迎える。林道に荷物を投げ出し、みな思いのままにのんびりする。残り食糧を食いまくったり、星を眺めたりするが、疲れもあって早々とシュラフに入る。

12/30 快晴

あるき沢橋 6:54 - 8:06 **鉄塔下** 8:17 - 8:59 **鷲ノ住山入り口** 9:20 - 10:16 **夜叉神峠ゲート**

最終日は、かったるいことに、鷲ノ住山の登りが控えている。今日から入山のパーティも多く、山の状況などを尋ねられながらゆっくりと帰る。最後の大展望にこの山行を思い出し、夜叉神トンネルに入る。

山よさよなら～ごきげんよろしゅう～また来るときにもわらっておくれ～

トンネルを抜ければそこはもう雪の世界ではなかった。

充実度満点で、まさに『合宿』そのものだった。これも好天に恵まれたからこそだろう。1999年すべての集大成にふさわしい山行だった。甲府でうまいほうとうを食べ、歳末の東京へと帰途に就く。

【本記録は、山と溪谷 2001年9月号に掲載されました。】

9918 南八ヶ岳/VR:旭岳東稜～権現岳

日程：2000.2.11～13 参加者：岡田 尾崎

2/11 登山口 11:30-15:10 旭東稜取付 (幕)

ホームに雪がちらほらとのっかった清里駅で、観光客といっしょに下車する。美しの森近くの登山道入り口で、歩き始めるべくザックを持ち上げた瞬間、ウエストベルトプラスチック部品の片方が破損。幸い、ストラップの付け替えで済んだが、実はこれが後への暗示だったのか...

地獄谷林道をとぼとぼと歩き始めるころにはいつのまにかさえない天気となる。どこからともなくピンコーンとスキー場のリフトの音が聞こえてきて、やる気をそがれる。それでもコースタイム通りに地獄谷出合いに到着し、雪が降るなか幕営。あす旭岳東稜を目指すという他パーティも近くにテントを張っている。

2/12 発 6:45-9:10 尾根が雪壁に消える地点-10:35 五段ノ宮(待)11:30-17:20 旭岳-17:40 幕

快晴だ。明るくなるころ出発する。最初のうちは高度よりもむしろ距離を稼ぐ。一ヶ所、両方が切れた急な所を下降する。やがて、いよいよ急登が始まると、右手には赤岳天狗尾根が見渡せる。はるか上方にあった「カニのハサミ」や「大天狗」が、みるみるうちに近づいてくる。

左上方には、いよいよ「五段の宮」らしき岩壁が迫り、快晴の青空を背景に2-3人のクライマーが取り付いているのが見える。登っていた尾根は、左右から上がってくる小尾根に消え入り、急な一枚斜面となる。行く手は、どうにもそこだけ何も生えていない。雪崩れそうないやな感じだ。ガイドブックによると、岩場よりもむしろここが最大の核心部とか。ビーコンON。突然、バサッという音と共にルート右側が雪崩れる。やばい。念のためザイルをつないで登り、岩場の基部に着く。

順番待ちの後、取り付くが、1段目から難しい。先行ですいすいと登っていた人たちが信じられない。腕がびんびんになって、でもここで力尽きたら落ちるという状態になって強引に1本だけ生えている木を頼りに上へ。2段目も侮れず、右下がすっぱりと切れ落ちていて、しかも足場の間隔が広い。1段目よりは易しく突破。3段目。取り付いてみると結構かぶっている。下から見ると分には岩の割れ目から登れそうに見えたが、毛手アイゼンで荷物を背負ったこの状態では、ホールドスタンスがあまりにも頼りない。何度やってもだめ。こわい。もう一度だけ、だめだったら左のバンドへ逃げよう。最後のチャレンジで落ちた。墜落中の0コンマ数秒が、とてもとても長かった。本当に幸運なことに、ザックから草付きに落下したので、どこもぶつけず痛い思いすらまったく無い。が、やはりまわりのみんなに迷惑だったろう。

2段目を終えたところから左へバンドをトラバースし、巻き道と合流するところでビレイ点を求めるが、結局無理せず懸垂で下降した。懸垂せずに無理して命とりになると、ピナ1枚シュリング1本とで天秤にかけた。残置。

せいぜい気を落ち着けて、巻き道に入る。巻き道とはいえ、見た目以上にいやらしいので最初からスタックで進む。雪が多いと雪崩れるかもしれないような、急峻な窪状の地形だ。先行パーティの落とす雪塊もザーザー落ちてくるので、けっこう悪い。何はともあれ岩場の上に出て、ナイフリッジの雪稜となる。ここから先もかなりやせた稜であり、所によっては微妙な雪氷技術が必要だ。ゆっくりでもいいから、1回1回、這い松やスノーバーでピレイをとりながら、かなり慎重に進む。後続パーティーに道を譲る。先ほどのピナとシュリングを回収してきてくれた。ありがとうございます。自分の技術のなさに、あらためて反省と焦りみたいなものを感じる。しかしもう日が暮れかけている。すでに空は夕焼け色が支配している... せめて頂上に明るいうちに着かなければ。高度感ばりばりでスノーバーのささがりが悪く、もしも、、、! 無事に通過できるよう、祈っていた。最後の1P、山頂に到達した瞬間、冬の西風が容赦なくたたきつけ、ぬれた手袋がみるみるうちに凍りつく。それでも頂上の標識でピレイを取らねば。2人ともなんとか登頂を果たす。

中アが切り絵のようなシルエット。金峰・五丈岩から昇った太陽が、木曾駒ヶ岳の向こうに沈むまで、何をやっているんでしょうね、人間は。冬山なんか来て、何をやるの? 落ちたショックは大きい。

さあどうする!? どこでテントが張れる??? ツルネの樹林内は安心だが遠い。反対方向は? あそこっ! 権現との鞍部の佐久側這い松の中。あそこなら5分くらいでいける。風もさえぎられそう。凍った手袋に手を押し込んで、鞍部へと急ぐ。到着したときには日はとつぷりと暮れ、月がこうこうと僕らを照らすなか、整地して幕営した。

テントの中へなだれ込めば、尽き果てた。ようやく安全地帯だ。飯を作るのも面倒なので、適当に行動食などで済まして寝る。

2/13 発 8:45-9:21 権現岳 9:40-10:46 青年小屋 11:16-13:30 観音平 13:58-16:09 小淵沢

やはり昨日のショックは大きい。予定通り権現を越えて観音平に向かうことにするが、出発は9時前と遅い。疲れきっている感じだ。しかし一般道は楽で、長いハシゴも慎重に行けば難なく越える。雪は少ないようだ。

紺碧の空に雪稜の美しい権現岳に立つ。しばらくは微妙な下りだが、青年小屋からは編笠山を巻き、観音平へ下る。それでも下界ははるか下である。以前、西高山行について行ったときは気持ちよく歩いたアプローチ道であるが、今回はきつかった。とにかく小淵沢駅までがんばって歩く。

9919 頸城・西海谷山塊 / ST:大渚山

日程：2000.3.19～20 参加者：岡田・山田・上野・尾崎

3月19日

小谷温泉 7:10 - 8:40 雨飾山登山道分岐 (ベース設営) 9:15 - 11:30 大渚山 12:00 ?
12:45 鎌池上 13:00 ? 13:20 ベース

3連休を利用して雨飾山と大渚山を滑ろうと欲張った計画で出発。上野と山田は車で前夜発、岡田さんと尾崎は夜行列車利用で、早朝南小谷駅に集合する。小谷温泉から少しの間は林道に雪がなく、スキーを担いでの歩きとなるが、ほどなくシールが使えるようになる。雨飾山登山道との分岐にある雪原にベースを張る。本当なら雨飾を先に打ちたいところだが、時間が遅いため今日は大渚山往復とする。湯峠経由で尾根上を進み、最後の急登をひと登りで大渚山山頂に着く。雨飾の南稜が高い。山頂からは登ってきた尾根沿いではなく、南側を大きく巻くようにして滑降する。期待の大斜面だが雪が腐っていて快適とは言い難く、湯峠からの林道スキーの方が楽しいくらいだった。ベースに戻ってからは都岳連で講習を受けてきた尾崎の指導でビーコン訓練を行う。宝探してみたいで楽しく、何回か繰り返すうちに段々要領も得てきて、皆見つけるまでの時間が短くなる。実際に仲間が埋もれているときに練習どおり冷静に捜索ができるかについては不安が残るが、あらかじめビーコンによる捜索訓練をしておくことは大切だと感じた。その後は雪洞を作ったりして遊んでいるうちに日没となる。

3月20日

いよいよ雨飾アタックと思うも、天気がどうも冴えない。夜半から雪が降り続き、ほとんど吹雪、視界もあまりない。あっさりアタックをあきらめて、南側の小山から標高差 100m程度の新雪滑降を数回楽しんだ後、再訪を期して小谷温泉へと下山した。

(山田 記)

都立西高WV部活動報告

1997 年度

山行名	日程	山域	OB 参加者
5 月月例山行	5/24	奥多摩：御岳山（中退）	清野(41), 鈴木(48)
6 月月例山行	6/27-28	丹沢：塔ノ岳	土田(46)
個人山行	7/12	奥多摩：本仁田山	
夏山合宿	7/20-26	北アルプス：薬師岳～槍ヶ岳	土田(46), 尾崎(47)
春山偵察	8/20-23	南アルプス：早川尾根	上村(47)
沢登り	9/13-14	上越：巻機山米子沢	高橋(40), 内田(42), 尾崎(47)
個人山行	9/28	奥多摩：川苔谷逆川	尾崎(47), 星野(47)
10 月山行	10/10-11	西上州：両神山	
11 月山行	11/22-23	北八ヶ岳：天狗岳	清野(41), 菊地(46)
スキー合宿	1/4-7	アサマ 2000 パーク	木村(46)
1 月山行	1/31-2/1	北八ヶ岳：蓼科山	土田(46), 尾崎(47)
2 月山行	2/14-15	日光：女峰山	土田(46), 尾崎(47)
春山合宿	3/26-29	八ヶ岳：硫黄岳	上野(48), 細田(49)

1998 年度

山行名	日程	山域	OB 参加者
新入生歓迎山行	4/19	奥多摩：川苔山	
5 月月例山行	5/23-24	奥多摩：雲取山	上村(47), 鈴木(48), 橋本(50)
6 月月例山行	6/27-28	丹沢：檜洞丸	細田(49)
夏山合宿	7/20-24	北アルプス：槍ヶ岳～蝶ヶ岳	細田(49), 天野(50)
春山偵察	8/20-22	北八ヶ岳：硫黄岳～天狗岳	
沢登り	9/12-13	奥秩父：笛吹川東沢釜ノ沢	内田(42), 尾崎(47), 細田(49)
10 月山行	10/10-11	奥秩父：乾徳山	
11 月山行	11/28-29	南会津：会津駒ヶ岳	尾崎(47)
スキー合宿	12/26-29	万座スキー場	天野(50), 帆苅(50)
1 月山行	1/30-31	日光：男体山	清野(41), 菊地(46)
2 月山行	2/27-28	信越：四阿山	尾崎(47), 橋本(50)
春山合宿	4/3-6	北八ヶ岳：硫黄岳～茶臼岳	上野(48), 細田(49)

1999 年度

山行名	日程	山域	OB 参加者
新入生歓迎山行	4/29	奥多摩：鷹ノ巣山	佐藤(特), 小野久(特), 尾崎(47)
5 月月例山行	5/23-24	奥多摩：雲取山	江川(45), 細田(49)
6 月月例山行	6/12-13	丹沢：蛭ヶ岳～檜洞丸	上村(47), 天野(50)
夏山合宿	7/21-25	北アルプス：後立山連峰	細田(49), 天野(50)
9 月月例山行	9/11-12	丹沢：塔ノ岳	天野(50), 清水(50)
沢登り	9/25-26	上越：魚野川南カドナミ沢	加藤(35), 尾崎(47), 星野(47), 細田(49)
10 月山行	10/9-10	尾瀬：燧ヶ岳	
11 月山行	11/13-14	上越：平標山	尾崎(47)
スキー合宿	12/26-29	上越：水上宝台樹スキー場	上遠野(17), 細田(49), 天野(50)
1 月山行	1/22-23	奥秩父：金峰山	細田(49), 佐藤(52)
2 月山行	2/15-16	信越：四阿山	細田(49), 佐藤(52)
春山合宿	3/29-30	八ヶ岳：杣添尾根～横岳	灘吉(48), 佐藤(52)

西朋登高会 会則

1986年9月1日制定

2001年4月23日改定

第1章 名称・目的

第1条 本会は「西朋登高会」と称する。

第2条 本会はスポーツ精神を遵守し、会員相互の登山活動を協力して実践すると共に、西高ワンダーフォーゲル部の指導にあたる。

第3条 本会の事務局は、毎年、総会において定める。

第2章 組織・会員

第4条 本会の会員は、西高ワンダーフォーゲル部に在籍したもの、または有志で、総会で承認を受けたものにより構成する。

第5条 本会は次の役員をおく。

1. 会長.....会を代表し、事務局をおく。
2. チーフリーダー.....山行全体を掌握する。
3. 学生リーダー.....学生を中心とした山行を掌握する。
4. 会計.....財政を管理する。
5. 装備.....共同装備を管理する。
6. 記録.....山行記録をまとめ、会報および西朋通信を発行する。
7. 西高係.....西高ワンダーフォーゲル部を指導する。
8. ホームページ係.....西朋登高会ホームページを管理する。
9. 超OB係.....現役を引退したベテラン会員対象の山行を企画実施する。

第6条 前条の役員のうち、会長は総会にて選出し、他の役員は会長が指名する。

第7条 本会は4月に、会長が召集して総会を開く。

第8条 総会では、次のことを議事とする。

1. 前年度活動報告
2. 前年度会計報告
3. 新年度役員選出
4. 新年度活動計画
5. 新年度予算案
6. 新会員承認
7. 会の運営に必要な事項

第9条 本会は原則として毎月1会、チーフリーダーが召集して例会を開く。

- 第10条 例会では、次のことを議事とする。
1. 山行報告
 2. 山行計画
 3. 会の運営に必要な事項
- 第11条 本会は年1回、会員相互の親睦を図るため、西朋祭を行う。
- 第12条 本会には次の会員を置く。
1. 特別会員...西高ワンダーフォーゲル部の顧問を務め、本会に大いに言献した先生。
 2. 一般会員（現役会員）...会の活動に関心を持ち、合宿山行や総会、例会及び西朋祭などに参加する会員。
(会報、西朋通信などを事務局より送付する)
 3. OB会員...現在は会の活動から遠ざかっているが、総会や西朋祭に参加でき得る会員。
(総会などの連絡・会報・西朋通信のみ事務局より送付する)
 4. 超OB会員...現在は会の活動から遠ざかっているが、総会や西朋祭に参加できる会員。
(総会などの連絡・会報・西朋通信等、連絡不要の会員)
- 第13条 前条のOB会員及び超OB会員について、次の場合一般会員（現役会員）より移行する。
1. 本人の希望による。
 2. 5年以上連絡がない人は、総会での協議により、OB会員とする。後に本人の希望により、一般会員に戻ることができる。

第3章 会費・会計

- 第14条 本会の運営のため、次のとおり会費を徴収する。
1. 一般会員（現役会員） : 年額 4000 円
 2. OB会員 : 年額 1000 円（数年分前納できる）
 3. 特別会員・超OB会員 : 会費なし
- 第15条 一般会員のうち、合宿山行などに積極的に参加する会員からは、装備費を別途徴収する。
- 第16条 会計年度は、4月から翌年3月までとする。
- 第17条 会計は、普通会計と特別会計に分ける。
- 第18条 普通会計は、会費収入をあて、装備・会報発行・通信事務などに使う。
- 第19条 特別会計は、西高ワンダーフォーゲル部指導謝礼金および会費収入よりの積立

金および寄付金をあて、遭難対策基金とする。

第4章 山行

第20条 本会は、次の合宿山行を持つ。

1. 新人合宿
2. 夏山合宿
3. 冬山合宿

第21条 会員は合宿山行の他に、各人の目的に応じて、個人山行を行う。

第22条 山行に前もって、計画をチーフリーダーに知らせる。

第23条 山行計画には、次のことを明記する。

1. 行程
2. 同行者
3. 最終下山予定日
4. 緊急連絡先
5. その他

第24条 山行後、山行報告を記録係に提出する。

第5章 西高ワンダーフォーゲル部の指導

第25条 本会は、西高ワンダーフォーゲル部が安全かつ意欲的な活動を実践できるよう、部の顧問教諭と協力して指導にあたる。

第26条 西高係は、顧問教諭およびワンダーフォーゲル部員と密接な連絡をとる。

第6章 装備

第27条 本会は共同装備を持ち、会員はこれを利用できる。

第28条 装備係は共同装備を管理する。

第29条 個人装備は各個人が負担する。

第7章 遭難対策

第30条 会員が遭難したときには、一致協力して救助に努力する。

第31条 積極的に山行している会員は、山岳保険に加入する。

第32条 山岳保険金の使途に関する権限は、本会が有する。

第33条 遭難が起きたときには、会に遭難対策本部を設置し、会長は必要な係を任命する。

第34条 遭難救助に要した経費は、山岳保険金をあて、不足分は当事者が負担する。

第35条 会の遭難救助基金は、当座必要な費用の立替に使う。

第8章 会則の修正・改正

第36条 この会則の修正や改正は、総会で議決する。

第9章 施行

第37条 この会則は、2002年度の総会后より施行する。

編集後記

「西朋26」発行からはや5年、「西朋27」の作成が大変遅くなり、まことに申し訳ございません。わたくしの怠慢をどうぞお許してください。

今回は、1997年度から1999年度の山行記録を収録しました。2000年度以降の記録と、西朋登高会創立50周年特集は、ひきつづき、「西朋28」として発行したいと思います。

この記録集は、山行での写真撮影、担当振り分け、原稿の執筆など、多くの皆さんの努力があって完成したものです。ご協力くださった多くの方々に、感謝の気持ちを述べたいと思います。ありがとうございました。

2004年4月24日 47期 尾崎 宏和

西朋 27

2004年4月24日発行

発行者 西朋登高会（会長 山野 裕）

発行所 横浜市青葉区桂台 1-10-2

山野 裕 付 西朋登高会

編集者 尾崎 宏和

PDF版 <http://seihou.cside.com>